行動計量学会報

# 日本行動計量学会第 42 回大会報告

第 42 回大会実行委員長 木村　邦博

9 月 2 日から 5 日の 4 日間，東北大学川内キャンパスにおいて，日本行動計量学会第 42 回大会を開催させていただきました．開催にあたり，多くの方からご高配を賜りました．厚くお礼申し上げます．

参加者数は，チュートリアルセミナーが 83 名，大会が 338 名でした．セッション数は，特別セッションが 21，一般セッションが 10 で，合わせて 31 となりました．

主な会場は川内北キャンパスの講義棟でしたが，9 月 4 日のみ，会場を東北大学百周年記念館川内萩ホールに移し，特別講演，総会，公開企画（ミニコンサートと公開シンポジウム）および懇親会を実施しました．

本大会を通して，様々な専門領域の研究者が，特に方法論に関して議論を交わす機会を提供できたのでしたら，そしてそれによって学会が目指していることの実現に貢献できたのでしたら，幸いです．同時に，本大会では，過去の大会で提供されてきたサービスを用意できなかったり，学会員の皆様の要望に十分にお答えすることができなかったりしたかもしれないと，申し訳なく思っている次第です．

学会大会の運営方法の規格化・統一化は，学会員の皆様に対するサービスの質を保証し，参加者の皆様に安心していただくために，重要なことと思います．実際，今回の大会開催の準備や当日の運営に当たっても，これまでに整備されてきた大会運営マニュアルの内容は，たいへん心強いものでした．

しかし，諸事情で，規格化・統一化が難しい面もあるかと思います．今大会の経験から気づいたことを，簡単に記させていたければ幸いに存じます．

まず，開催校に特有の問題や制約などがあります．今大会でも当初は，可能な限り近年の大会を参考にし，同様の工夫をすることができないかと考えておりました．しかし，会場となる施設の設備上の問題や利用規程による制約などで，実施できないと判断したこともいくつかありました．

また，行動計量学会のように学際的な性格が強い学会では，会員の皆様が学会大会に期待されることも様々かと思います．その中には，同時に満たすことが困難と思われることも含まれています．特に，その期待が，会員の皆様が他に所属している，個別の領域の学会における慣習などに基づいている場合には，何らかの普遍的な原理を持ち出さなければ，調整が難しいのかもしれません．

多様性に配慮しつつ普遍的原理を適用することで，学会大会の場が活性化することを祈っております．

**木村　邦博**（きむら・くにひろ）
**東北大学大学院文学研究科教授**
東北大学大学院文学研究科博士後期 3 年の課程単位取得退学，博士（文学）．新潟大学人文学部助手，静岡大学人文学部助教授等を経て，2008 年 4 月より現職．2006 年～2009 年日本行動計量学会理事，2009 年～英文機関誌 *Behaviormetrika* 編集委員，2012 年～広報委員会委員．

## 役員異動のお知らせ

以下のように学会役員に異動がありました.

**・選挙管理委員会**

**委員長**

松本　渉　（就任）

**委員**

宮崎　慧　（就任）

山本　倫生（就任）

**・柳井レクチャー委員会**

**委員長**

岩崎　学　（就任）

**委員**

林　　文　（就任）

山岡　和枝（就任）

吉野　諒三（就任）

**【学会選出による関連団体等の委員】**

**・統計関連学会連合**

**・連合大会プログラム委員会委員**

羽鳥　剛史（就任・継続）

川端　一光（就任・新規）

齋藤　朗宏（退任）

**・連合大会運営委員会委員**

鈴木　雅之（就任・継続）

山本　倫生（就任・新規）

山田　剛史（退任，委員長）

宮崎　慧　（退任）

## 2014 年度学会賞受賞者について

**学会賞選考委員長　繁桝　算男（帝京大学）**

### 1. 学会賞受賞者の選考について

今年度の学会賞の受賞者について，ご報告いたします．近年，受賞者選考の手続きはきちんと確立されており，本年もその手続きを踏襲しました．すなわち，各賞（功績賞，優秀賞，奨励賞，出版賞）について，候補選出のための基本情報を収集するためのワーキンググループが設置されました．そのワーキンググループは，いくつかの基準によって候補者をリストアップし，受賞者の選考に必要な資料が収集されました．ワーキンググループからの報告をもとに，学会賞選考委員会は，候補のそれぞれについて慎重に評価し，それぞれの賞について，候補者を絞り理事会に報告しました．その後，理事会の審議により，最終候補者を決め，該当者の承諾を確認したうえで受賞者が決定されました．

### 2. 林知己夫賞（功績賞）

林知己夫賞（功績賞）は狩野裕会員です．狩野会員は，非常に優れた数理統計学の権威ですが，彼の研究者としての出発点は因子分析でしたし，その研究範囲は，行動計量学の目指すものと共通部分が多くあります．ちなみに，行動計量学に関連する研究論文が，行動計量学に三つ，Behaviormetrika に二つ，Psychometrika に四つ出版されております．そのほかにも数理統計学の専門誌に多数の論文を発表されていますが，一方では，「グラフィカル多変量解析」や「文科系のための数学入門」などの啓蒙的な本も出版されています．

行動計量学会の運営に関しましても，多大な貢献をされています．1997 年以来，行動計量学会の理事を務められており，2000 年から 2003 年まで欧文誌編集委員長を務められました．また，大阪で開催されました International Meeting of the Psychometric Society, IMPS では，会場委員会の委員長として IMPS の成功のカギとなる活躍ぶりでした．また，行動計量学の特集や，Behaviormetrika の special editor, 春の合宿セミナーや講習会の講師など，何回も協力されております．

行動計量学が多彩な応用力を持つべきなのはもちろんですが，数理統計学的な裏付けを必要としております．行動計量学の発展のための狩野会員の貢献は大きく，功績賞の対象となりました．

### 3. 林知己夫賞（優秀賞）

林知己夫賞（優秀賞）は岡田謙介会員です．岡田会員は，行動計量学会の欧文誌，Behaviormetrika に 2011，2012，2013 年と，念入りな構想に基づく，統計学的にも興味深い論文を続けて出版しています．

Okada, K. (2013). Is omega squared less biased? A comparison of three major effect size indices in one-way ANOVA. *Behaviormetrika*, 40(2), 129-147.

Okada, K. (2012). A Bayesian approach to asymmetric multidimensional scaling. *Behaviormetrika*, 39(1), 1-14.

Okada, K. & Mayekawa, S. (2011). Bayesian nonmetric successive categories multidimensional scaling. *Behaviormetrika*, 38(1), 17-31.

いずれも，行動計量学の領域におけるデータ分析の手法に新しい観点を与えるものです．ほかにも，Behavior Research Methods, Applied Psychological Measurements などに論文を書いています．

また，人文科学，社会科学における研究や実践活動にいて，統計学をどのように利用するべきかについての，公開セミナーの企画など啓蒙的活動にも熱心に取り組んでいます．大久保街亜氏との共著「伝えるための心理統計」は，わかりやすく心理学研究者のための統計学の指針を説明しており，出版賞を受賞されました．この本は，心理統計と称しておりますが，もちろん，人文社会科学に共通する方法論を提供しております．

行動計量学会大会において，アイデアもあり，分析の間違いなどが残らないように堅実にまとめている発表を毎年行っていることも評価されます．

これらは行動計量学の発展のために寄与する優れた業績であり，優秀賞の対象となりました．

### 4. 肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）

肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）は山本倫生会員です．奨励賞の審査において特に注目された論文は，Behaviormetirka に掲載された

A General Formulation of Cluster Analysis with Dimension Reduction and Subspace Separation

です．この論文は，多変量データによる，意味のあるクラスター化とそのための有意味な次元縮約を同時に達成するための統計モデルとそれに基づく推論技法を提案しています．著者の知識と努力を感じさせるものです．そのほかにも年次大会において意欲的な研究を発表しており，今後，すぐれた行動計量学的研究を続けられることが期待できる点で奨励賞に値すると評価されました．

### 5. 杉山明子賞（出版賞）

杉山明子賞（出版賞）は猪口孝会員と藤井誠二会員です．杉山明子賞（出版賞）は過去 3 年程度に刊行された行動計量学に関する優れた図書の著者・訳者が対象ということで，会員が過去三年に出版された著書訳書を網羅し，そのなかから，猪口先生，藤井先生が編集され，自らも一部書かれている，

Inoguchi, T. & Fujii, S. (Eds.) (2012). The Quality of Life in Asia: A Comparison of Quality of Life in Asia. Amsterdam: Springer

が，受賞の対象となりました．本書は，アジア全域「生活の質」世論調査を包括的に，体系的に，科学的に分析した成果を発表したものであり，生活の満足度がどのような場合に最も高いかについてアジア各国を俯瞰的に実証的に調べ上げたことは世界に例がありません．アジア各国の生活の質調査のために多大な努力が傾けられていることが評価され，行動計量学の柱の一つである，調査データの収集と分析に関する優れた出版物として出版賞の対象となりました．

**繁桝　算男**（しげます・かずお）
**帝京大学文学部教授，東京大学名誉教授**
日本テスト学会理事長．行動計量学会事務局長，欧文誌編集委員長，日本心理学会理事長などを歴任．

# 学会賞受賞者より

## 林知己夫賞（功績賞）を受賞して

大阪大学　狩野　裕

自身で応募する学術賞はともかく，学会賞はサプライズをもって受け止めることが多いのではないでしょうか．私の場合もそうでした．日本行動計量学会の設立は 1973 年．私が同学会に入会させて頂いたのは 1992 年．40 年を超える伝統ある同学会の活動の中で，私はその約半分の期間を会員として活動の場を与えられ，育てて頂いたことになります．まずは，この素晴らしい環境を与えて下さった日本行動計量学会と先達の先生方，特に，学会創立時のメンバーで，学会賞に名を冠しておられ，そして歴代の理事長でいらっしゃる林知己夫先生，肥田野直先生，水野欽司先生，杉山明子先生に感謝を申し上げます．

学会への貢献でこれというものは思いつきませんが，あえて挙げさせて頂くならば，1999 年 3 月に大阪大学で開催した「第 2 回春の合宿セミナー」でしょうか．地方開催でしたが 200 余名の参加を得，毎日の懇親会（たこ焼きパーティ），学生と一緒に行ったサンドイッチマンが思い出されます．一つの特徴は「私ならこう教える基礎統計」というセッションを組み統計教育にも焦点を当てたことでしょうか．一方で，ホテルの部屋の割り振りなど失敗や反省点も数多くありました．

行動計量学や Behaviormetrika に何篇か論文を掲載して頂きましたが，その中で「構造方程式モデリングは，因子分析，分散分析，パス解析のすべてにとって代わるのか？」行動計量学（2002, Vol.29）が記憶に残ります．当時流行り始めていた構造方程式モデリング（SEM; 共分散構造分析）と従来の方法とを比較しそれらの間の相対的な優劣を整理したものですが，SEM を勉強したい方にとっては適当な題材だったのかもしれません．

行動計量学を定義するのは困難ですが，実証研究やデータを扱う実務における統計的方法論の発展とそれを効果的に適用することによる実質科学への貢献をその目的とするならば，行動計量学の未来は明るいと思います．と言いますのは，特にこの 10 年に情報通信技術や測定技術が発展しデータの採取方法が多様になったことによって，データ処理の新たな方法論が求められているからです．各種のセンサー技術によって測定・生成されるビッグデータ，ネットワーク経由で刻々収集される Web データや Web 調査データ，また，fMRI など非侵襲型で採取できる身体内のデータの登場は，私たちに新たな研究課題を与えてくれています．私も伝統的なテーマに加えてこういった新しい課題へも挑戦していきたいと考えています．

第 4 代の理事長でいらっしゃった柳井晴夫先生が昨年末に亡くなられたのは大変残念なことでした．柳井先生は本学会への入会を勧めて下さり，その後も何かと目をかけて下さいました．2000 年に Behaviormetrika の編集委員長にご指名いただいたのも柳井先生からでした．

学会賞の選出には多大な労力を要します．理事長の岡太彬訓先生ほか，選考委員や関係理事，事務局の先生方のボランティア精神がなければ進みません．関係の先生方に厚く御礼を申し上げます．狩野は近年体調がすぐれず，また元々微力にしか過ぎませんが，何とか体調を整え学術の発展に寄与できるよう精進する所存であります．引き続きご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます．

**狩野　裕**（かの・ゆたか）
**大阪大学教授（大学院基礎工学研究科）**
大阪大学大学院基礎工学研究科前期課程修了・工学博士（論文）．大阪府立大学，筑波大学，大阪大学人間科学部等を経て現職．人間科学部では社会科学の統計学を講述．1997 年より日本行動計量学会理事．2000～2002 年 Behaviormetrika 編集委員長．専門は統計学，多変量解析，計量心理学，統計リテラシー．

## 林知己夫賞（優秀賞）を受賞して

専修大学　岡田　謙介

この度は，林知己夫先生の名が冠された栄誉ある賞を頂戴いたしまして，光栄に感じると同時に，身の引き締まる思いでおります．

林先生とは残念ながら直接お話しさせていただく機会はございませんでしたが，『行動計量学序説』（1993 年，朝倉書店）を大学生の頃に読んだことは，思い返せば私がこの分野の研究の道に進む上できっかけの一つを作った出来事ではなかったかと思います．行動計量学の核心は「データによる現象解析」の情熱であること，データ解析は執拗なものでなければならないこと，といった，普通の統計学の教科書とは趣を異にする，活字の奥から潜在変数のように感じられる熱意のこもった筆の運びに感銘を覚えたこと，そしてこういう研究がしてみたいと思ったことを記憶しております．

東北大学で開催された日本行動計量学会第 42 回大会におきまして，この度の賞を頂戴いたしました．東北大学は，私の学部・大学院での指導教官である繁桝算男先生が，アメリカで Ph.D.を取得したのち，帰国して最初の本務校とされた大学でありました．そんなところにも不思議なご縁を感じております．この度の栄誉は，繁桝先生をはじめ日ごろ接してくださる先生・先輩・同僚など多くの方々のご指導やご協力の賜物と感じており，この場をお借りして感謝を申し上げる次第です．

行動計量学の研究はおもしろいです．一方で，研究の発表や査読の過程などでは，不甲斐なさを感じることが多々ある日々でもあります．しかしながら，この賞を激励の意味でいただきましたことを励みに，これからも根気強く研究活動を続け，少しでもおもしろい結果を学会や社会にお返しして行けたらと考えます．行動計量学会員の先生方におかれましては，これからもご指導いただきたく，またよろしければ研究の議論などもさせていただきたく，どうぞよろしくお願いいたします．

**岡田　謙介**（おかだ・けんすけ）
**専修大学人間科学部准教授**
東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了．博士（学術）．日本学術振興会特別研究員（PD），専修大学人間科学部講師を経て，2012 年 4 月より現職

## 肥田野直・水野欽司賞（奨励賞）を受賞して

京都大学大学院　山本　倫生

この度は栄えある賞をいただき大変光栄に存じます．今回の受賞は諸先生方のご指導・ご協力があってのことだと思いますので，まずは大学院においてご指導いただいた大阪大学大学院人間科学研究科の足立浩平先生，および同大学院基礎工学研究科の狩野裕先生に厚く感謝申し上げるとともに，普段よりご指導いただいている多くの方々に，この場をお借りして厚く御礼申し上げます．

私は修士課程の頃から関数データの多変量解析に興味を持っておりました．関数データ解析とは，得られたデータの背後に想定される関数そのものを解析対象とする手法のことで，時間や位置情報に依存するデータの解析方法として現在も多くの理論的・応用的研究がなされています．関数データの統計的推測を行う際には，その無限次元性が原因となり，通常のデータの場合は生じない様々な問題に直面します．最近は，関数データの新たな解析方法を開発するとともに，このような理論的な問題にも興味をもって取り組んでおります．

もともとは心理学分野から統計学の世界に入りましたが，最近では医学分野の臨床試験や疫学調査に生物統計家として参画することに加えて，遺伝子発現をはじめとするいわゆるオミクスデータを利用した予後予測因子の特定に取り組み始めています．その中で，ゲノミクスやメタボロミクスなど複数の網羅的解析を同時に行うマルチオミクス解析では，社会科学でも一般的な多変量解析法（多次元尺度構成法や正準相関分析など）が利用され，その分野独自の発展を遂げていることに最

近気づきました．機械学習の発展もあって，このようなバイオインフォマティクス分野の解析手法の研究にはめざましいものがあり，非常に刺激を受けるとともに，自身の研究の視野の狭さを痛感しております．

日頃は共同研究等に多くの時間を割いていることもあり，自身の研究の進捗の遅さに焦慮することもあります．しかし今回奨励という温かい言葉で叱咤・激励いただいたことから，今後も自身の研究に打ち込み，その研究活動を通して学会に貢献して参りたいと存じます．

**山本　倫生**（やまもと・みちお）
**京都大学大学院医学系研究科**
**特定助教**
2013年3月大阪大学大学院基礎工学研究科博士課程修了．博士（理学）．日本学術振興会特別研究員（PD）を経て 2013 年 8 月より現職．

## 杉山明子賞（出版賞）を受賞して

**新潟県立大学学長兼理事長**
**東京大学名誉教授　猪口　孝**

1979 年パリでフランス世論調査研究所所長，ジャック・ルネ・ラビエ博士に面会を求め，ユーロバロメーターを発足させることに成功した秘訣は何か，アジアでやるとしたら注意すべきは何かを問いただした．当時，私はジュネーブ大学国際問題研究所客員教授であった．ラビエ博士はとにかく単純で明快な質問を継続的に聞くこと，質問はできるだけ日常生活にみられるような身近なものに引きつけて聞くことだとアドバイスしてくれた．私はその頃からアジアバロメーターを考えていたので貴重なアドバイスだった．アジアバロメーターのプロジェクトは私にとってパリの夢として長い間実現不可能だった．実現は 2003 年になる．とにかく文部科学省の科学研究費獲得は難関だった．

2003 年には企業回りをして，なんとかアジアバロメーター第一回を実施した．2004 年には外務省主唱の東アジア会議（EAS）の発足にタイミングを合わせた世論調査実施を外務省の費用で行った．2005 年には念願の科学研究費がとれ，2008 年まで毎年アジアバロメーターを実施した．すべて運が付いて回った．アジアバロメーターを実施したのはすでに東京大学を離れ，中央大学においてであった．2003 年から世論調査画定，実施，現地社会科学者との分析会議，ワーキング・ペーパー刊行，英語と日本語で実施ごとに学術報告書を明石書店などから刊行，さらに英文学術雑誌に論文刊行を続けた．主題は「生活の質 quality of life」に焦点をあてているが，健康，幸福，信頼，社会制度，政治信念，国際関係なども広くカバーした．英文学術書はシュプリンガーから二冊刊行した．今回受賞対象になった書物はその一冊である．日本語学術書は西村書店から代表的な論文を収録した大冊のもの，そして岩波書店から，より最近のものを軸にわかりやすく，読みやすいものを刊行した．シュプリンガーからさらに二冊執筆中である．

パリの夢から育てていったプロジェクトは運も良かったが，理解と支援を惜しまれなかった東京大学東洋文化研究所，中央大学研究開発機構，そして 2009 年からの新潟県立大学には感謝しすぎることはありません．国際コミュニケーション基金からは優秀研究賞（2007 年），「生活の質」国際研究協会（ISQOLS）からは生活の質研究の先駆者賞（2013 年）と研究フェロー賞（2014 年），そして日本行動計量学会からは出版賞（杉山明子賞）をいただきました．ありがとうございます．最後になりますが，最も感謝しなければならないのは共著者の藤井誠二准教授です．経済学，公共選択専攻で政治学専攻の私と二人三脚をこれほど長くできたのは珍しいと思います．あらためてありがとうございます．

日本行動計量学会とは長い縁をもっている．故柳井晴夫教授と一緒になって学会の前身となる勉強会・研究会を東大キャンパスで数年間参加した．私が留学したため，その後あまり積極的に参加できなかった．この度このような賞をいただき，縁の強さをしみじみとかみしめています．

**猪口　孝**（いのぐち・たかし）
**新潟県立大学学長兼理事長**
マサチューセッツ工科大学大学院博士課程修了．Ph. D in Political Science. 東京大学助教授・教授，国際連合事務次長補などを経て現職．東京大学名誉教授．

**藤井　誠二**（ふじい・せいじ）
**新潟県立大学国際地域学部准教授**
カリフォルニア大学アーバイン校大学院経済学研究科博士課程修了. Ph. D in Economics (2006). 中央大学科研費研究員，新潟県立大学国際地域学部講師などを経て，2014 年 4 月より現職.

## 第二次学会活性化検討委員会の提言内容の実現に向けて

**第二次学会活性化検討委員会委員長**
**繁桝　算男（帝京大学）**

第二次学会活性化検討委員会は，行動計量学会の将来を予測しどのような方向を目指すべきかについて提言を行った．この委員会の委員は，私を除いてはいずれも若く（少なくとも年取ってはおらず），先端的な研究を展開している方たちである．

世間では，データ分析に関する関心が高まっている．統計学に関する本がベストセラーになるという珍しい現象があったし，ビッグデータの解析力が企業の成長性のカギとなるとも宣伝されている．また，大学教育で身に付けるべき学士力として，データからの情報を取り出す力が挙げられることも増えた．このような世間の動きは，行動計量学会にとって追い風である．データ分析の手法の解析の開発や理論的裏付けのために数学の論理的展開力は不可欠であるが，データを分析してどのような情報をそこからくみ取るかは，数学や論理学ではなく，データの発生のメカニズムについての知識やアイデアが必要になってくる．そして，そのような知識やアイデアは，実際にデータを扱っている者の相互作用から生じることが多い．行動計量学会は，いろいろな分野の研究者や実践家が集まり，共通の方法論やそれぞれが独自に発展させてきたデータ分析手法の違いを意識できる場である．新しい手法や理論がここから発生することが期待できる．行動計量学に対する，このような期待を学会活性化検討委員会の委員全体で共有したように思う．

委員会の会議は，大学入試センターにおいて，予備的な会議を含め，4 回開かれた．また，メールによる活発な意見の交換があった．議事録を読み返してみると，出席者の全員が熱心に議論に参加し，率直な意見交換があったことが分かる．議論を通して，コンセンサスを得る努力がされた．今回の提言は，委員会全体でコンセンサスを得た意見である．それに加えて，各委員の署名入りで，それぞれが深く関係する分野での提言がなされている．この部分は若干それぞれの委員の個人的な意見も含まれている．

最終的な提言は，現実の状況を踏まえたうえでの未来志向の提言であり，近い将来に実現可能な選択肢を提供していると考える．先に挙げた異質の集団の交流の場として，最も重要なのが年次大会であるが，この提言を受けて，大会担当理事の森先生および，大会実行委員の中尾先生，中山先生が早速に次回の大会から実行可能な部分を実現しようと努力されている．学会活性化検討委員会としては，提言が単なる作文に終わることがないという一つの実践例になることを期待する．

行動計量学の研究が，手法の開発や理論的整備を経て学術論文として実を結ぶだけではなく，真に社会に役立つレベルに達するには，他の学会員にその技法のメリットがあることを説得できなければならないし，さらには社会に発信できなくてはならない．そのために，HP などの広報，ワークショップの企画などいろいろな活動が必要である．また大局的には行動計量学が現代社会の持つ諸問題の解決に寄与する存在であるためには，学会のシステムの効率化や規模拡大などの問題にもつながってくる．学会の意思決定システムや会員を増やすことなどについても，本委員会の報告に含まれる具体的提案が意味のあるものであることを願っている．

**＊提言の全文は会報末尾 32 から 39 ページに掲載**

## 「柳井レクチャー」創設

柳井レクチャー委員会委員長
岩崎　学（成蹊大学）

2013 年に逝去された故柳井晴夫先生の，行動計量学に関するご業績および学会へのご貢献を顕彰するため，「柳井レクチャー」の創設が 2014 年 11 月 10 日開催の学会理事会にて決定されました．柳井レクチャーの概要は以下の通りで，上記の理事会にて「柳井レクチャー委員会」の委員として下記の 4 名が選任されました．

委員長：岩崎　学
委　員：林　文，山岡　和枝，吉野　諒三

柳井レクチャーは 2015 年の大会から実施されます．

「柳井レクチャー」実施要領

1. 毎年 1 名，柳井レクチャーの講演者を選出し，日本行動計量学会大会において 1 時間程度の特別講演を行う．
2. 講演の内容は，故柳井晴夫先生のご業績に鑑み，行動科学における計量的方法の理論と応用とする．
3. 講演者の選出は，「柳井レクチャー委員会」にて決定する．
4. 講演者は，原則，日本行動計量学会会員とするが，非会員であることを妨げない．
5. 講演者には 10 万円を贈呈する．
6. 講演の内容は，「行動計量学」あるいは Behaviormetrika に論文として掲載する（ただし投稿の有無は講演者の選択）．
7. 当面 10 年間の取組とし，10 年後にその存続を含め理事会にて議論する．
8. 柳井家からのご寄付は柳井レクチャーの原資とし，日本行動計量学会事務局にて管理する．
9. 柳井レクチャー委員会のメンバーの選出を始め，柳井レクチャーに関する必要事項は理事会において，これを定める．

## 次の大会から新たな取り組みが始まります

－「第二次学会活性化検討委員会提言」を受けて－

大会担当委員会委員長
森　裕一（岡山理科大学）

次の第 43 回大会（首都大学東京）から，

・ポスター発表
・懇親会での交流促進（若手研究者への経済的支援）
・特別講演「柳井レクチャー」

を新しい企画として行っていくことになりました．前 2 つは，第二次学会活性化検討委員会から提出された提言（本会報の末尾参照）に基づくものです．3 つ目は，故柳井晴夫先生のご遺族からいただいた寄付の活用について検討したワーキンググループからの提案によるもので，理事会で認められたものです．「柳井レクチャー」については，本ページの左段に詳細が載っていますので，以下では，第二次学会活性化検討委員会からの提言への取り組みついて詳しく説明します．

### 第二次学会活性化検討委員会提言への取り組み

**■背　景**

第二次学会活性化検討委員会から，学会の活性化に対する提言が理事会に提出されました．各提案を実施するかどうか，実施する場合どのように具体化するかは，その内容の実現可能性や担当部署の判断を基に，理事会で決定していくことになります．ご覧のとおり，大会に関する提案がたくさん含まれていますので，大会担当委員会として，それらを検討し，学会としての動きを理事会に提案することにしました．

**■大会に関する提案とその対応**

大会に関係するものを抜粋して，まとめてみると，次のようになります．

I. 大会の内容に関する直接的な提言
(1) ポスター発表の採用
(2) 発表賞の創設
(3) 特別セッションの工夫（多彩なテーマ展開や他学会との合同企画）

(4) 海外学会との共同企画および英語で発表し議論するセッションの設定
(5) 若手に対する経済的支援（大会参加費と懇親会参加費の補助）
(6) 懇親会での交流を大切にするための若手への懇親会費用の補助
II. 大会に関係する間接的な提言
(7) 総会参加の促進
(8) 講演会・シンポジウムにおける時宜を得た企画の実施
(9) 研修会の実施
(10) データ解析コンペティションの実施
(11) 積極的な異分野交流

いずれも魅力的な提案ばかりで，積極的に導入したいところですが，大会担当委員会として，責任をもって進めることができるものと，担当外のものもあります．また，企画や運営の多くを大会実行委員会に委ねている現在の大会運営体制では，そのまま提案を実現しようとすると，大会実行委員会に多くの負担を強いることにもなります．新しい試みについては，2～3 年の試行期間も必要となるでしょうから，大会実行委員会だけでなく，学会からのサポートが必要と判断されます．そこで，次のように対応を考えることにしました．

(2)と(7)（(10)の一部も）については，大会担当委員会の責任と権限の範囲を超えていると考えられますので，しかるべき部署での検討をお願いすることにし，これら以外の実現をめざします．

まず，大会の内容に関係する(1)，(3)，(4)，(8)～(11)ですが，これらを積極的に実現していくためには，学会（理事会）の意向，大会以外の学会の活動状況，他学会の動向などを反映させる必要があります．また，今後開催される複数の大会を縦断した統一的な取り組みも必要となります．これらに対しては，全体を見通すことができる担当者を置くことが最善策と考えられますので，理事会などからその担当者を選出し，大会実行委員会に加わってもらうことがよいと判断しました．

次に，経済的な支援を考える(5)，(6)ですが，(5)の大会参加費については，すでに，学生参加者に対してディスカウント価格が設定されていますので，それ以上のことは当面行わないことにしました．(5)の懇親会費については，(6)と一緒に考えることにします．すなわち，懇親会での交流・親睦をより活発にすることが(6)の主たる目的であり，その誘引策の 1 つとして経済的支援を行おうということですから，これは前向きに考えるべきです．ただし，大会実行委員会の立場から言えば，それだけ収入が減ることになりますので，その一部を学会が負担することで，これを実現してもらうことにしました．

なお，これらの多くが新しい試みですので，まず，3 年間継続し，その後，必要に応じて見直しをすることも必要と考えました．

以上の案を 2014 年度第 3 回理事会で提案し，基本的に了承が得られました．学会からの担当者には，現理事であり，第二次学会活性化検討委員会の委員長でもある繁桝算男先生が選ばれました．

**■具体的な実現へ**

さっそく，来年，首都大学東京で開催される第 43 回大会の中尾実行委員長と中山実行副委員長に相談し，すぐに実現できることとして，

・ポスター発表
・懇親会での交流促進（若手研究者の経済支援）

を取り入れていただくことをお願いしました．

ポスター発表は，これまでの大会では行われたことがありませんでしたが，対面的なコミュニケーションにより，口頭発表では得られない研究の進化・深化が期待されます．特別／一般セッションがある中で，どのようにポスター発表を募集するか，どのように発表を進行するかなどは，これから大会実行委員会と学会からの担当者で詰めていくことになりますが，具体的な募集が出てきましたら，どうぞ，積極的にご応募下さい．

懇親会での交流促進は，若手の懇親会費の優遇により，多くの若手（研究者）に参加してもらおうという趣旨です．ここで，若手の定義と金額を決めるため，大会実行委員会からの意見も聞きながら，理事会で議論した結果，

・若　手 ＝ 学生（学生証を持っている人）
・参加費 ＝ 1,000 円（会員／非会員を問わず）

とすることにしました．学生のみなさんは，年齢に関係なく一律 1,000 円で参加できますので，どうぞ，昼間の会では得られない懇親とざっくばらんな研究交流を行って下さい．

上記以外の取り組みについても，大会の企画やプログラムを考える中で出てくることと思います．

**新しい取り組みへの期待と活用を**

どの大会においても，大会実行委員会が独自の企画を考えたりして，活発な大会となるよう工夫いただいています．それらに加え，今後は，ここで示した３つの新たな取り組みも実施されていくことになります．日本行動計量学会が，そして，行動計量学がより発展していくために，次回大会から取り入れられていく新しい企画にご期待いただくとともに，積極的に，それぞれの機会を活用していただきたいと思います．

## 役員（理事・監事）選挙実施のお知らせ

**選挙管理委員会**

会則第 12 条の規定に基づき，役員（理事および監事）の選挙を行います．選出される役員の任期は 2015 年 4 月 1 日から 3 年間です．今後の学会運営を担う会員を選出する重要な選挙です．有権者の方は確実にご投票下さるようにお願い致します．

**投票締切日：**

2015 年 1 月 16 日（金），必着

**選挙人および被選挙人（有権者）：**

2014 年 4 月 1 日現在正会員またはシニア会員で，2014 年 11 月 10 日現在ひき続き正会員またはシニア会員であるもの（2014 年 4 月 2 日以降に入会した正会員と，4 月 2 日以降に準会員から正会員への種別変更のあった会員を除く）

実施詳細は別紙による実施要領を参照下さい．有権者には選挙関係の下記の書類が各 1 点同封されていますのでご確認下さい．

・役員選挙実施要領
・選挙人および被選挙人名簿
・投票用紙
・投票用紙封入用小封筒
・返信用封筒

なお，書類の不備，封入漏れなどに気付かれた場合は，選挙管理委員会へ至急ご連絡をお願い致します．

**選挙管理委員会：**

松本　渉(委員長)　宮崎　慧　山本　倫生
（連絡先）
〒569-1095　大阪府高槻市霊仙寺町 2-1-1
関西大学総合情報学部 松本渉研究室内
日本行動計量学会 選挙管理委員会
Phone：　072-690-2422
E-mail:　bsj_senkan2014@googlegroups.com

## 運営委員会より

運営委員会委員長　大森　拓哉（多摩大学）

### 平成 27 年度研究部会の募集

日本行動計量学会では，研究活動の活性化をはかるため，研究部会を設け，活動経費の助成を行っています．研究部会には，一定地域での研究推進活動や研究普及活動を主な目的とする地域部会，および，オリジナリティーに富んだ研究成果を挙げることを目的とする研究グループがあります．活動経費は，地域部会については 1 部会上限 5 万円程度，研究グループは 1 部会 5 万円（採択件数は優れた研究計画若干）です．地域部会については，都心部から東京近郊までを主たる活動地域とする部会を考えておりません．平成 27 年度の研究部会の募集を下記要領で行います．なお，採否の審査結果は，4 月初旬にお知らせする予定です．

○提出書類（下記の内容を電子メールにてお送り下さい.）：

(1) 地域部会：研究部会名，代表者，参加予定者（会員・非会員別），助成希望金額，活動予定（この順序で書くこと）

(2) 研究グループ：研究部会名，代表者，参加予定者（会員・非会員別），研究計画，活動予定（この順序で書くこと）

○応募締切：平成 27 年 1 月 31 日（土）必着

○送付先（問合せ先）：

日本行動計量学会運営員会委員長
大森　拓哉
ohmori@tama.ac.jp

なお，研究部会に関する規約は Web ページ
http://www.bsj.gr.jp/bukai/bukai.pdf
をご参照下さい．

### 第 100 回行動計量シンポジウム「確率論とリスク論の悩ましき関係」のご案内

リスク学の基礎は確率論であるから，両者の相性はもともと良い筈である．ところが近年，リスク対象の拡大や複雑化が進むにつれ，両者の間に軋みが目立ち始めた．だがこの軋みは単なる技術的な困難さを超えて，学問の本質に関わる問題を内包している．今回のシンポジウムでは，この問題を巡ってホットな議論が展開されることを期待している．

オーガナイザー: 木下　冨雄　（国際高等研究所）
日時：2015 年 1 月 25 日（日）13 時～17 時
会場：同志社大学寒梅館ハーディーホール
（室町キャンパス）
http://www.doshisha.ac.jp/information/facility/kambai.html

発表者とタイトル

(1) 木下　冨雄（国際高等研究所）：確率論とリスク論の狭間で

(2) 椿　広計（統計数理研究所・リスク解析戦略研究センター）：多様なステークホルダーが存在する社会のリスクに基づく意思決定について

(3) 柴田　義貞（福島県立医大）：放射線リスク－確定的影響と確率的影響

(4) 池田　三郎（筑波大学名誉教授）：「低頻度・高損失事象」に係わるリスク分析の課題

・討論者: 繁桝　算男（帝京大学）
・司会: 岡太　彬訓（多摩大学）
参加費: 無料

主催学会及び共催学会の学会員以外の方々の参加も歓迎いたします．
主催：日本行動計量学会
共催（予定）：日本リスク研究学会，日本心理学会，日本社会心理学会，日本統計学会，放射線影響学会

## 第 17 回春の合宿セミナーのご案内

星野　崇宏（東京大学）

第 17 回春の合宿セミナーを以下の場所・日時にて開催いたします．申し込み方法等はメーリングリスト等にて，順次お知らせいたします．多くの皆様のご参加をお待ちしております．

日時：2015 年 3 月 7 日（土），8 日（日）(2 日間)
会場：東京大学駒場 I キャンパス（東京都目黒区）
ホームページ：
https://sites.google.com/site/BSJSpringSeminar/home

以下講演名は仮題

・(基調講演) 行動計量学における機械学習・特にディープラーニングの可能性
麻生　英樹先生（産業技術総合研究所）
・データ解析のための統計モデリング入門: 一般化線形モデル・階層ベイズモデル・MCMC
久保　拓弥先生（北海道大学）
・欠測データ解析とその応用
高井　啓二先生（関西大学）
・状態空間モデルによる時系列解析の統一的理解と応用
猪狩　良介先生（ビデオリサーチ）
・行動計量学のためのベイズ推定におけるモデル選択・評価
岡田　謙介先生（専修大学）
・調査法の新展開
小野　滋先生（インサイトファクトリー）
・クラスタリング・セグメンテーションとその応用
中山　厚穂先生（首都大学東京）

企画担当・お問い合わせ先：
星野　崇宏（東京大学）
E-mail：bayesian@p.u-tokyo.ac.jp

## 第 42 回大会チュートリアルセミナーのご報告

運営委員会委員長　大森　拓哉（多摩大学）

日本行動計量学会第 42 回大会チュートリアルセミナーが以下のとおり開催されました．

日時：2014 年 9 月 3 日（火）13：30～16：30
会場：東北大学川内キャンパス　講義棟 C 棟 C200 教室
テーマ：消費者行動データ分析のための構造モデリング
——入門からビッグデータ活用まで——
講師:石垣　司（東北大学大学院経済学研究科）
参加人数：83 名

消費者行動データ分析のための構造モデリングの理論と実践について，東北大学の石垣司先生を講師にお招きしてお話しいただきました．第 98 回行動計量シンポジウムの際にも石垣先生にはご登壇いただきましたが，今回は時間を多くとって，理論的な部分も含めて詳細までお話しいただきました．

具体的には，消費者行動の要因の因果構造を確率モデルとして表現するアプローチのご紹介から，機械学習やデータマイニングなどによる購買行動分析や構造抽出，構造モデリングを用いたビッグデータ活用の実践などについてお話しいただきました．マーケティングの現場での最先端の内容で，参加者の方々の興味関心も大変深かったものと思われます．セミナー終了後も質問の列が絶えず，石垣先生には遅くまでご対応いただきました．

講師の石垣先生，および参加いただきました皆様に，改めて御礼申し上げます．

## 第 99 回行動計量シンポジウム「Big Data in Psychological Science and Related Disciplines ー心理学と関連諸領域におけるビッグデーター」のご報告

岡田 謙介 （専修大学）

2014 年 9 月 6 日（土）に，専修大学神田キャンパスにおいて，「Big Data in Psychological Science and Related Disciplines ー心理学と関連諸領域におけるビッグデーター」というタイトルで第 99 回行動計量シンポジウムを開催いたしました．本シンポジウムは，主催の専修大学社会知性開発研究センター／心理科学研究センターと，行動計量学会の共催という形で行われました．最近社会的に注目をあびているものの，わが国の心理学関連ではまだ研究の多くない「ビッグデータ」をとりあげ，その解析におけるアイデアや具体例，考え方などを主要なテーマといたしました．

第一部では，開催校でもあった専修大学の研究員らから，心理科学研究に際してのビッグデータ解析事例や方法論の提案を中心に，3 件の研究報告がありました．第二部では，ソーシャルネットワークデータ，教育・入試データ，発達コホートデータのそれぞれ最前線でビッグデータ解析を研究および実践されている 3 名の先生方から，ご講演をいただきました．すべてのトークが英語であり通訳もないという，見方によっては敷居の高いかもしれないシンポジウムでしたが，総計 71 名の参加をいただき，有意義な議論をすることができました．

講演者とタイトルは次の通りです．

第一部（研究報告）

- 高橋　良幸（専修大学心理科学研究センター）：Bayesian approach for the mechanism of hippocampal synaptic plasticity
- 蔵屋　鉄平（専修大学大学院文学研究科）・澤　幸祐（専修大学人間科学部）：The periodicity of depression in animal models -Time series analysis for long-term activity of model animals-
- 岡田　謙介（専修大学人間科学部）：Bayesian evaluation of informative hypotheses in meta analysis

第二部（講演）

- Michal Kosinski（Department of Computer Science, Stanford University）：Prediction of personal attributes from digital records
- 大久保　智哉（大学入試センター研究開発部）：Changing a large-scale test using computer-based testing
- 竹内　文乃（国立環境研究所環境健康研究センター）：Insights from a nationwide children's study

## 新たな名誉会員に関するご報告

**名誉会員担当理事　足立　浩平（大阪大学）**

行動計量学の発展に多大な功労をなされてきた柏木繁男氏（千葉大学名誉教授・城西国際大学アセスメントセンター顧問）は，理事会より名誉会員として推薦され，2014 年 9 月 4 日の総会での承認を経て，名誉会員となられました.

**日本行動計量学会会則第 5 条**

(3) 名誉会員　行動計量学の発展に功労のあった者で，理事会が推薦し，総会の承認を得た者

## 事務局からのお知らせ

**事務局長　菊地　賢一（東邦大学）**

**学会協賛イベントについて**

| 承認日 | 協賛イベント | 開催年月日 |
|---|---|---|
| 2014 年 9 月 3 日 | 日本音響学会第 137 回技術講習会「R を用いた統計の基礎講座」 | 2014 年 11 月 4 日～5 日 |
| 2014 年 8 月 21 日 | 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2014」 | 2014 年 12 月 13 日～14 日 |

(2014年8月～2014年11月承認のもの)

## 2014 年度統計関連学会連合大会の報告

2014 年 9 月 13 日（土）より 16 日（火）にかけて，東京大学本郷キャンパスにおいて 2014 年度統計関連連合大会が開催されました．詳細につきましては会報末尾 40 から 43 ページをご参照下さい.

## 2013 年度決算書・2014 年度予算書の修正について

**監事　村上　隆**
**監事　渡部　洋**

9 月 4 日に開催されました 2014 年度総会において，2013 年度決算と 2014 年度予算が承認されました．その後，総会で承認されました決算書と予算書について，一部修正が必要となりました．修正点は，下記の通りです.

・見出しの「増減」を「予実差異」に修正
・決算書の予実差異の計の欄の符号を修正
・予算書の予実差異すべての欄の符号を修正

見出しと符号のみの修正で，金額の変更はありません．会報には，修正後の決算書と予算書を掲載しております.

## 訃報

古川俊之名誉会員が，2014 年 10 月 21 日にご逝去されました.

謹んで哀悼の意を表します.

## 日本行動計量学会第 43 回大会のお知らせ

大会実行委員長　中尾　啓子（首都大学東京）

2015 年度，第 43 回日本行動計量学会の大会を以下のとおり，首都大学東京で開催させていただくことになりました.

日 時: 2015 年 9 月 1 日 (火) ～ 9 月 4 日 (金)
場 所 : 首都大学東京南大沢キャンパス
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
大会実行委員長 : 中尾　啓子
副委員長 : 中山　厚穂
首都大学東京南大沢キャンパスアクセス：
http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html

首都大学東京は，2005（平成 17）年 4 月に，東京都の 4 つの大学「東京都立大学」・「東京都立科学技術大学」・「東京都立保健科学大学」・「東京都立短期大学」を統合して設置された新しい大学です．南大沢キャンパスは，それまで東京都立大学のキャンパスでした．東京都立大学は昭和 24 年に設立され，平成 3 年に南大沢に移転し，そして再編・統合された後，「首都大学東京」に名前が変わりました.

平成 26 年現在で，首都大学東京の学生数は 6,987 名（うち女子学生は 2,617 名），大学院生は 2307 名（うち女子院生は 655 名）です．それに対し，教員数は 687 名（うち女性教員は 116 名）で，教員と学生の比率は単に数値で計算すると，学部生 10 名に対して 1 人の教員ということになります．学部によって多少の差はありますが，いわゆるマンモス大学ではなく，学生に個別的な指導ができる環境にあると言えるでしょう.

今回，首都大学東京で日本行動計量学会の大会が開催されることになって，教員として大変光栄に思っております．私の個人的な経験によりますと，日本行動計量学会の大会は，生産的で活発な議論が交わされ，それを通じて研究者同士の交流を深められる，という特徴を持つ大会です．次回の大会も，是非有意義な大会になることを願って，実行委員一同，一生懸命務めさせていただきます.

来年度の大会から新たな企画として，特別講演「柳井レクチャー」を開始いたします.「柳井レクチャー」の詳細については，本会報の 8 ページを参照して下さい.

また来年度から，新たにポスター・セッションを設置し，研究者同士の交流の場を広げたいと考えております．現在，大会実行委員会では，会合やメールで大会に関する準備を進めております．次回の企画について，何かご提案などがございましたら，遠慮なくご連絡下さいませ.

そして懇親会は，若手の研究者たちにとって，他の研究者との交流・親睦を深めることができる貴重な場です．ただ残念なことに，例年懇親会に出席する費用が，学生や院生にとっては負担が大きく，出席したくても経済的に困難だという若手研究者が多かったのも事実です．そこで来年度は，学会の意向およびサポートを受けて，学生・院生は懇親会の負担を 1,000 円にするという試みを実施することになりました．年齢に関わらず，学生・院生の方々は，どうぞこれを利用して懇親会にご出席下さい.

まだ詳細のスケジュールなどは，確定しておりませんが，例年と同様に，特別セッションの企画募集をした後に，一般研究発表の募集を行う予定です．今後，申し込み期限などが決まり次第，会員向けメーリングリスト，学会 WEB ページ，会報と通じて広報させていただきます．多くの方々のご参加をお待ち申し上げます．それでは，また 2015 年 9 月 1 日から 9 月 4 日に，南大沢でお目にかかりましょう.

【シリーズ海外レポート⑨】

## 洋書翻訳のための旅行記

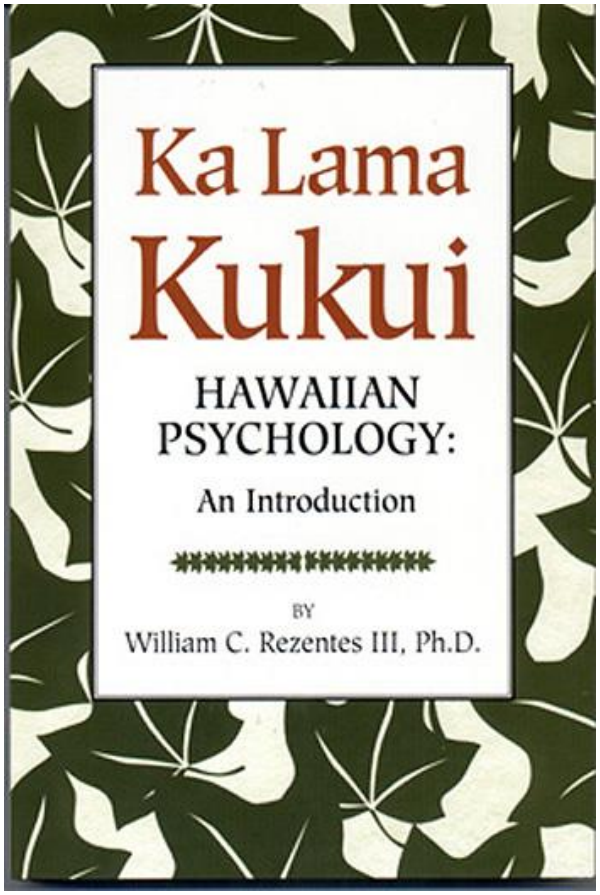
山田　剛史（岡山大学大学院教育学研究科）

広報委員を担当しております，岡山大学の山田と申します．海外レポートを書かせて頂くことになりました．この海外レポートではこれまで，海外の学会の様子が報告されることが多かったのですが，今回はちょっと趣向を変えて，洋書の翻訳に関する海外でのエピソード（原著者との交流）についてご紹介したいと思います．

### 翻訳への第一歩

話の始まりは，下記の本を翻訳して出版したいと思ったことでした．

William C. Rezentes III　Ka Lama Kukui -Hawaiian Psychology: An Introduction




といっても，実際に翻訳をしたのは私自身ではなく，私の妻（山田美穂）でした．彼女は，就実大学という岡山の私立大学で教員をしています．専門は，臨床心理学です．さらに趣味と実益を兼ねてフラダンスを習ったり教えたりしています．この本はどんな本かというと，『ハワイ人の血筋と伝統をもつ個人や家族のための，文化と深く関連したセラピーとヒーリング活動の手引きである．著者の臨床実践に基づき，“ハワイ人とは誰のことか？”というテーマに始まり，伝統的なハワイ人の価値観，ハワイ人における“精神疾患”，そしてハワイ人のヒーリング実践，セラピー，治療的環境の考察へと続く．ハワイと西洋の治療とヒーリングの方法論について比較検討し，その統合を試みている．』といった概要の本です．原著者は，ネイティブハワイアンの血を引いていて，カウンセラーでもあり，Ph.D を持っている研究者でもあります（さらにフラダンサーでもあり，ミュージシャンでもあるという多才な方です）．臨床心理の仕事をしていて，ハワイも大好きな妻はこの本にいたく感銘を受けて，翻訳して出版したいと思ったようです．

岡山大学出版会に，この本の翻訳に関する企画書を作成し提出したところ，審査に通り，出版してもらえることになりました．これが 2012 年の 10 月末頃のことです．それから，原著者にコンタクトを取り，原著者の住むハワイまで行き，翻訳権についての交渉を行ったり，契約を交わしたり，と初めての経験を色々しました．この本（翻訳書）が，2014 年 10 月に出版されました．

この海外レポートでは，翻訳本出版までのドタバタというか，私が体験した色々なエピソードをお伝えしたいと思います．

### 翻訳権取得のための下準備あれこれ

洋書を翻訳し出版するには翻訳権（Translation rights）が必要です．恥ずかしながら，そんな基本的なことも知らずに翻訳をしようと思っていました．通常，翻訳権の交渉は出版社同士で行われるそうですが，何冊も翻訳書の出版を経験されている先生に相談してみたところ，直接出版社に問い合わせてみたらよいとアドバイスをもらいました．そこで，出版社との交渉をしてみようと考え

ました．しかし，上手く行きません．出版社の WEB サイトを探したのですが，リンク切れで実体がありません（一体どうなっているのか，この時点では全く謎でした．後で分かったのですが，この本は著者の自費出版だったのです．出版社を経由していなかったんですね）．何とか，著者のメールアドレスを見つけることができて送ってみましたが，こちらもアドレスが無効で届かない….電子メールがダメなら，ということで原著者の勤務先の住所が分かったのでエアメールを送りました（2012 年 11 月 5 日）．ダメ元で送ってみたエアメールに対して，著者から返信の電子メールが届いたのです．これが 2012 年 11 月 12 日のことでした．原著者は，自身の本が翻訳されるということ自体には興味を持ってくれたようでした．でも，我々のことを完全には信用していない感じです（それはそうですよね．会ったこともない，得体の知れない人間なのですから）．こちらがどんな人間かを知りたがっているようでした．そこで，自己紹介のスライドを作って送り，「私たちは怪しい人間ではないですよ」アピールをしました．苦労してスライドを作った甲斐があり，何とか信用してもらう事ができました．そして，2013 年 2 月に原著者と会う約束を取り付けたのです．

## 原著者にハワイで会う

原著者は，William C. Rezentes さんですが，彼は「自分のことを Pila と呼んでくれ」と言うので，これからピラさんと書きます．William の愛称が Bill で，Bill のハワイ語読みが Pila なのだとか．2013 年 2 月 19 日，ピラさんと，アラモアナのリケリケドライブイン（Like Like Drive Inn）というレストランで待ち合わせをしました．いよいよ対面の時です．待ち合わせの目印として，著書「Ka Lama Kukui」を持参．ドキドキしながら，リケリケドライブインの前で待ちます．すると，現れました！ピラさんです．かなりがっしりした感じの人物です（腕の毛ももじゃもじゃな感じです）．若干緊張しながら挨拶を交わしました．

ドライブインで朝食を取りながら（ポルトガルソーセージ入りオムレツをごちそうになりました），お互いのことを自己紹介したり，「Ka Lama Kukui」を翻訳しようと思った経緯などを伝えたりしました．こちらの考えは伝わったようです．ただし，ピラさんとしては「文化の違いもあるので，翻訳の際に正確なニュアンスが伝わらないと困る」と考えていたようです．そして，日本への留学経験があり，日本語に堪能な友人がいるので，翻訳原稿をその友人に見てもらいたい，原稿をチェックさせて欲しいと言われました．翻訳を許可するかどうかはその後で判断したいということです．当然ですが，そう簡単にはいきませんね．

2013 年 2 月 19 日　ハワイ・オアフ島・アラモアナのリケリケドライブインにて原著者との初めての出会い

「これからも連絡を取り合おう」とは言われましたが，確実な成果を得られぬまま，ピラさんとの初対面を終えて帰国しました．

## 原著者に再びハワイで会う

しかし，数日後，事態が急展開します．ピラさんからのメールが届きました．メールを読むと，ピラさんの友人（日本語が堪能）が，翻訳原稿を読んで，この原稿（日本語の翻訳の出来）を高く評価していたということが書かれていました．それで安心したのでしょうか．ピラさんが翻訳本の出版にぐっと乗り気になってくれました．本に書かれた細かな表現についても，詳しく解説してくれて，翻訳原稿のブラッシュアップが進みました．そして，ついに原稿が完成し，出版が近づいてきました．次に必要なステップは，正式な契約書（岡

山大学出版会と著者間の）を交わすことです．ピラさんに直筆のサイン（署名）をもらうために，二度目のハワイ行きを決めました．これが 2014 年 3 月のことです．待ち合わせ場所は，ワイキキから 6～7km 離れた山の中にある「ワイオリ・ティールーム(Waioli Tea Room & Bakery)」．地元（マノア地区）では有名なカフェのようです．

滞在したホテルのあるワイキキでレンタサイクルと Wi-Fi ルーターを借り，スマートフォンの地図アプリを頼りに進みます．ハワイ大学マノア校の広大なキャンパスを通り抜けて，待ち合わせのカフェに向かいました(結構な山の上にあって，たどり着いた頃には汗だくになっていました)．

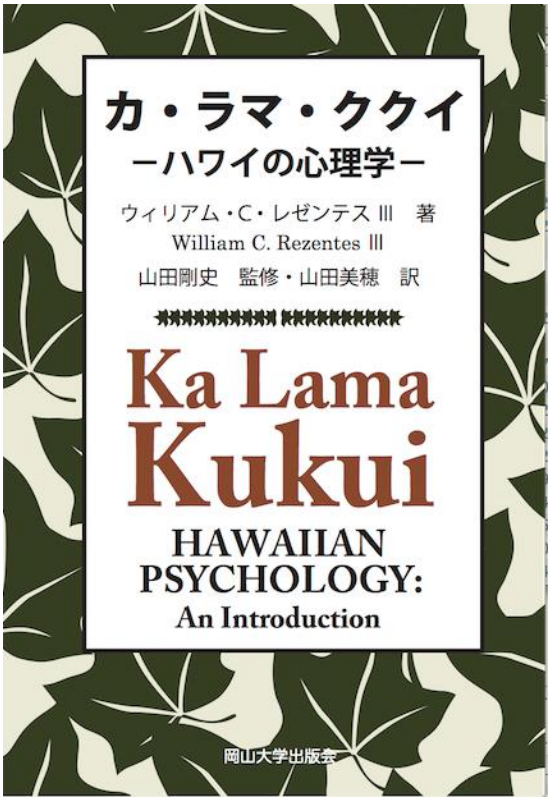
そして，一年ぶりのピラさんとの対面です．ピラさんは，生花のレイを持って出迎えてくれました（次ページに写真あり）．日本からは風呂敷や龍の置物をお土産に持って行きました．

2014 年 3 月 7 日　ハワイ・オアフ島・マノアのワイオリ・ティールームにて原著者と二度目の出会い　↓ピラさん近影

ワイオリ・ティールームは，ピラさんが子どもの頃から通っている大切な場所だそうです．緑に囲まれた素敵なカフェでした．公式契約書へのサインを頂き，翻訳本出版のための長い旅もいよいよ終わりに近づいてきました．

ピラさんは，日本での翻訳本の出版を心待ちにしてくれています(「これで君たちも日本で注目されるようになるね」と嬉しそうに言ってくれましたが，果たしてそんなに売れるでしょうか…)．でも，契約書にサインしてから半年も経ってしまいました．ちなみに，初版の発行部数が少なかったため,「この本は岡山大学だけで売り出す本なのか？」と聞かれました．そうではなく日本全国で販売される本なのですが．ピラさんには「アマゾンでも買えるよ」と返事をしました．

このような冒険の末，出版されるのが，下記の本です．ピラさんのご厚意と岡山大学出版会・山本千明様のご尽力により，原著と同じカバーデザインを再現できました．本の所々にあるマーク（bamboo stamp）も再現しています．興味を持ってくださった方は是非お手にとっていただけたら嬉しいです．



ウィリアム・C・レゼンテスⅢ（著）・山田剛史（監修）・山田美穂（訳）　カ・ラマ・ククイーハワイの心理学　岡山大学出版会　William C. Rezentes Ⅲ　Ka Lama Kukui Hawaiian psychology: An introduction　2014 年 9 月

最後にハワイで撮った写真をいくつか紹介します．Mahalo（マハロ．「ありがとう」の意）！

この写真は，ハワイの地元料理です．オノハワイアンフード(Ono Hawaiian Food)というレストランで撮影したものです．Ono は「美味しい」という意味のハワイ語です．写真の中央やや左上にあるのはタロイモの料理（ポイと言います）です．どろっとしていてヨーグルトみたいな感じですが，味は薄いです（というか，ほとんど味がしない）．このポイは，Ka Lama Kukui にも登場します．

こちらは，ピラさんがくれた香りの良い生花のレイ(lei)です．レイには，Aloha（アロハ．無償の愛）の意味が込められています．

この写真は，ビショップミュージアム(The Bernice Pauahi Biship Museum)で撮影しました．訪れた時，ちょうど藤子・F・不二雄展覧会を開催していました．ビショップミュージアムでは，ハワイの伝統文化が紹介されています．ここでの見聞は，翻訳にも活かされています．

**山田　剛史**（やまだ・つよし）
**岡山大学大学院教育学研究科准教授**
東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学．修士（教育学）．2004 年岡山大学教育学部専任講師．2007 年より現職．2009 年より当学会広報委員．

# 2014 年度日本行動計量学会総会議事録

日時：2014 年 9 月 4 日 11 時 15 分～12 時 15 分
場所：東北大学百周年記念会館川内萩ホール

## 1. 開会の辞

菊地事務局長より，開会の挨拶があった．

## 2. 学会挨拶

岡太理事長より，挨拶があった．近年，会員特に準会員の減少が目立つことから，第二次学会活性化委員会を立ち上げて対策を検討したことが報告された．また，理事会が学会を適切に運営する責任を会員に対して負っていることを明確に示すために，今年度の総会から，各委員長や監事，事務局長が壇上に並ぶ配置に変更したことが説明された．

## 3. 大会開催校代表挨拶

東北大学の佐藤文学研究科長より，ご挨拶をいただいた．

## 4. 議長選出

東北大学の熊谷龍一会員が選出された．

## 5. 報告及び議事

(1) 平成 25 年度事業報告及び決算報告

菊地事務局長より，平成 25 年度事業報告及び決算報告が行われた．続いて，村上監事より，事業報告及び決算報告について 5 月 25 日に監査を行い，事実に相違ないことが報告され，質疑応答の後，承認された．

(2) 平成 26 年度事業計画及び予算案

菊地事務局長より，平成 26 年度事業計画及び予算案の説明があり，承認された．

(3) 名誉会員推薦

足立名誉会員担当理事より，理事会が推薦した柏木繁男氏が紹介され，承認された．

## 6. 故柳井晴夫先生からのご寄附について

岡太理事長より，柳井晴夫元理事長のご遺族より寄附をいただき，ワーキンググループを立ち上げ，故人の意思を尊重する使途を検討中であることが報告された．

## 7. 第二次学会活性化検討委員会からの提言

繁桝委員長より，配付資料に基づき，学会の活性化のための提言が報告された．

## 8. 学会賞授与

繁桝学会賞選考委員長より，選考の経緯，及び学会賞受賞者とその受賞理由の報告があった．功績賞を狩野裕会員，優秀賞を岡田謙介会員，奨励賞を山本倫生会員，出版賞を猪口孝会員，藤井誠二会員に授与する発表があり，賞状及び副賞が授与された．

## 9. 次期大会開催校代表挨拶

中尾大会実行委員長より，第 43 回大会は，2015 年 9 月 1 日～4 日の日程で，首都大学東京の南大沢キャンパスで開催する予定であるとの報告があった．

## 10. 大会実行委員会

木村大会実行委員長より，挨拶があった．

## 11. 閉会の辞

菊地事務局長より，閉会の挨拶があった．

# 日本行動計量学会平成25年度決算

| 収入 | 予算 | 実績 | 予実差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 5,999,531 | 5,999,531 | 0 | |
| 前年度事業未払繰越金 | 4,050,000 | 4,050,000 | 0 | 和文・欧文40-1、J-stageデータ作成、41回大会準備金 |
| 学会費 | 5,000,000 | 5,114,000 | 114,000 | 滞納分支払いを含む |
| 学会費(次年度以降前受け分) | 2,500,000 | 2,209,000 | △ 291,000 | 前受け分 |
| 学会誌売上金 | 250,000 | 138,250 | △ 111,750 | 南窓社、日本出版貿易 |
| 広告費 | 240,000 | 390,000 | 150,000 | 数理システム、北大路書房 |
| 預金利子 | 1,000 | 964 | △ 36 | |
| 著作権料 | 250,000 | 383,201 | 133,201 | NII-ELS、Medical Online、出版者著作権管理機構 |
| 雑収入 | 0 | 1,000,000 | 1,000,000 | 柳井晴夫先生寄附金 |
| 各委員会からの返還金等 | 0 | 395,318 | 395,318 | 和文、欧文、運営、研究部会1件 |
| 学術定期刊行物補助金 | 0 | 0 | 0 | 不採択 |
| 学会活動積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 事務局整備積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 会員名簿発行積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 計 | 18,290,531円 | 19,680,264円 | 1,389,733円 | |

| 支出 | 予算 | 実績 | 予実差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度事業未払分 | 4,050,000 | 2,776,514 | △ 1,273,486 | 和文・欧文40-1、J-stageデータ作成、41回大会準備金 |
| 学会誌制作費和文誌40-2 | 2,000,000 | 719,598 | △ 1,280,402 | |
| 学会誌制作費和文誌41-1 | 2,000,000 | 0 | △ 2,000,000 | 26年度に繰越 |
| 学会誌制作費欧文誌40-2 | 1,200,000 | 912,438 | △ 287,562 | |
| 学会誌制作費欧文誌41-1 | 1,200,000 | 0 | △ 1,200,000 | 26年度に繰越 |
| シンポジウム費用 | 300,000 | 0 | △ 300,000 | |
| 各委員会活動費 | 450,000 | 450,000 | 0 | 和文、欧文、運営(各15万円) |
| 研究部会費 | 100,000 | 100,000 | 0 | 研究部会2件(各5万円) |
| 学会事務委託費 | 2,000,000 | 1,237,741 | △ 762,259 | |
| 印刷費等 | 50,000 | 39,900 | △ 10,100 | 学会入会案内 |
| 会報発行費 | 900,000 | 800,705 | △ 99,295 | 会報4号分 |
| 通信費 | 10,000 | 7,024 | △ 2,976 | |
| インターネット利用料 | 60,000 | 51,864 | △ 8,136 | 会員向けメーリングリスト、ドメイン名 |
| 消耗品費 | 50,000 | 4,987 | △ 45,013 | |
| 会合費 | 250,000 | 150,639 | △ 99,361 | 理事会、監査作業、広報委員会、大会担当委員会 |
| 雑費 | 100,000 | 18,165 | △ 81,835 | 振込手数料 |
| インターネットバンキング利用料 | 20,000 | 18,900 | △ 1,100 | 学会名義の銀行口座 |
| 学会誌保管料等 | 200,000 | 84,000 | △ 116,000 | |
| J-stageデータ作成 | 550,000 | 193,348 | △ 356,652 | |
| 大会準備金 | 300,000 | 300,000 | 0 | 42回大会 |
| 予備費 | 700,000 | 0 | △ 700,000 | |
| 各種分担金 | 80,000 | 80,000 | 0 | 横幹連5万円、統計関連学会連合3万円 |
| 会員名簿作成 | 0 | 0 | 0 | |
| 学会活動積立金 | 500,000 | 500,000 | 0 | 50万円積立 |
| 事務局整備積立金 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | 100万円積立 |
| 学会賞基金積立金 | 150,000 | 150,000 | 0 | 15万円積立 |
| 会員名簿作成費積立金 | 0 | 0 | 0 | |
| カード手数料 | 2,500 | 3,150 | 650 | 会費納入手数料 |
| その他 | 68,031 | 10,500 | △ 57,531 | 法律相談料 |
| 当年度事業未払繰越金 | 0 | 3,200,000 | 3,200,000 | 和文・欧文41-1 |
| 次年度への繰越金 | | 6,870,791 | 6,870,791 | |
| 計 | 18,290,531円 | 19,680,264円 | 1,389,733円 | |

| 特別会計(別口座) | 期首 | 支出 | 収入 | 期末 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 学会賞基金(林知己夫賞) | 2,910,362円 | 150,630円 | 150,453円 | 2,910,185円 | 功績賞10万円1名、優秀賞5万円1件、15万円を一般会計より積立 |
| 学会賞基金(肥田野・水野賞) | 340,856円 | 60,630円 | 172円 | 280,398円 | 奨励賞3万円2件 |
| 学会賞基金(杉山賞) | 798,110円 | 50,000円 | 0円 | 748,110円 | 出版賞5万円1件 |
| 学会活動積立金 | 5,208,878円 | 0円 | 500,835円 | 5,709,713円 | 50万円を一般会計より積立 |
| 会員名簿作成費積立金 | 1,062,338円 | 0円 | 168円 | 1,062,506円 | |
| 事務局整備積立金 | 4,154,526円 | 0円 | 1,000,672円 | 5,155,198円 | 100万円を一般会計より積立 |

日本行動計量学会　　自 平成25年4月1日
至 平成26年3月31日

会計監査の結果、事実の通り、相違ないことを証します。

平成26年 5 月 25 日　　監事

渡部 洋 (渡部)

村上 隆 (村上)

# 日本行動計量学会平成26年度予算（案）

| 収入 | 26年度予算 | 25年度実績 | 予実差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度繰越金 | 6,870,791 | 5,999,531 | △ 871,260 | |
| 前年度事業未払繰越金 | 3,200,000 | 4,050,000 | 850,000 | 和文・欧文41-1 |
| 学会費 | 5,000,000 | 5,114,000 | 114,000 | 滞納分支払いを含む |
| 学会費（次年度以降前受け分） | 2,500,000 | 2,209,000 | △ 291,000 | 前受け分 |
| 学会誌売上金 | 150,000 | 138,250 | △ 11,750 | |
| 広告費 | 300,000 | 390,000 | 90,000 | |
| 預金利子 | 1,000 | 964 | △ 36 | |
| 著作権料 | 300,000 | 383,201 | 83,201 | |
| 雑収入 | 0 | 1,000,000 | 1,000,000 | |
| 各委員会からの返還金等 | 0 | 395,318 | 395,318 | |
| 学術定期刊行物補助金 | 0 | 0 | 0 | 26年度は応募せず |
| 学会活動積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 事務局整備積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 会員名簿発行積立金取り崩し | 0 | 0 | 0 | |
| 計 | 18,321,791円 | 19,680,264円 | 1,358,473円 | |

| 支出 | 26年度予算 | 25年度実績 | 予実差異 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 前年度事業未払分 | 3,200,000 | 2,776,514 | △ 423,486 | 和文・欧文41-1 |
| 学会誌制作費和文誌41-2 | 2,000,000 | 719,598 | △ 1,280,402 | 実績は和文誌40-2 |
| 学会誌制作費和文誌42-1 | 2,000,000 | 0 | △ 2,000,000 | 実績は和文誌41-1 |
| 学会誌制作費欧文誌41-2 | 1,200,000 | 912,438 | △ 287,562 | 実績は欧文誌40-2 |
| 学会誌制作費欧文誌42-1 | 1,200,000 | 0 | △ 1,200,000 | 実績は欧文誌41-1 |
| シンポジウム・セミナー費用 | 300,000 | 0 | △ 300,000 | |
| 各委員会活動費 | 450,000 | 450,000 | 0 | 和文、欧文、運営（各15万円） |
| 研究部会費 | 100,000 | 100,000 | 0 | 研究部会2件（各5万円） |
| 学会事務委託費 | 2,000,000 | 1,237,741 | △ 762,259 | 役員（理事・監事）選挙費用を含む |
| 印刷費等 | 50,000 | 39,900 | △ 10,100 | |
| 会報発行費 | 900,000 | 800,705 | △ 99,295 | 会報4号分 |
| 通信費 | 10,000 | 7,024 | △ 2,976 | |
| インターネット利用料 | 60,000 | 51,864 | △ 8,136 | 会員向けメーリングリスト、ドメイン名 |
| 消耗品費 | 50,000 | 4,987 | △ 45,013 | |
| 会合費 | 250,000 | 150,639 | △ 99,361 | |
| 雑費 | 100,000 | 18,165 | △ 81,835 | |
| インターネットバンキング利用料 | 20,000 | 18,900 | △ 1,100 | 学会名義の銀行口座 |
| 学会誌保管料等 | 200,000 | 84,000 | △ 116,000 | |
| J-stageデータ作成 | 550,000 | 193,348 | △ 356,652 | |
| 大会運営費 | 400,000 | 0 | △ 400,000 | 大会業務委託基本料、Web運営費用 |
| 大会準備金 | 300,000 | 300,000 | 0 | 43回大会分 |
| 予備費 | 1,200,000 | 0 | △ 1,200,000 | |
| 各種分担金 | 30,000 | 80,000 | 50,000 | 統計関連学会連合3万円 |
| 会員名簿作成 | 0 | 0 | 0 | |
| 学会活動積立金 | 500,000 | 500,000 | 0 | 50万円積立 |
| 事務局整備積立金 | 1,000,000 | 1,000,000 | 0 | 100万円積立 |
| 学会賞基金積立金 | 150,000 | 150,000 | 0 | 15万円積立 |
| 会員名簿作成費積立金 | 0 | 0 | 0 | |
| カード手数料 | 2,500 | 3,150 | 650 | |
| その他 | 99,291 | 10,500 | △ 88,791 | |
| 当年度事業未払繰越金 | 0 | 3,200,000 | 3,200,000 | |
| 次年度への繰越金 | | 6,870,791 | 6,870,791 | |
| 計 | 18,321,791円 | 19,680,264円 | 1,358,473円 | |

| 特別会計（別口座） | 期首 | 支出 | 収入 | 期末 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 学会賞基金（林知己夫賞） | 2,910,185円 | 150,000円 | 150,000円 | 2,910,185円 | 功績賞10万円1名、優秀賞5万円1件、15万円を一般会計より積立 |
| 学会賞基金（肥田野・水野賞） | 280,398円 | 30,000円 | 0円 | 250,398円 | 奨励賞3万円1件 |
| 学会賞基金（杉山賞） | 748,110円 | 50,000円 | 0円 | 698,110円 | 出版賞5万円1件 |
| 学会活動積立金 | 5,709,713円 | 0円 | 500,000円 | 6,209,713円 | 50万円を一般会計より積立 |
| 会員名簿作成費積立金 | 1,062,506円 | 0円 | 0円 | 1,062,506円 | |
| 事務局整備積立金 | 5,155,198円 | 0円 | 1,000,000円 | 6,155,198円 | 100万円を一般会計より積立 |

日本行動計量学会　　自 平成26年4月1日
至 平成27年3月31日

# 理事会議事録

## 日本行動計量学会 2014 年度第 1 回理事会議事録

日時：2014 年 4 月 7 日（月）18：00～20:15
場所：大学入試センター3 階視聴覚室

議事進行　岡太彬訓理事長
出席者　飽戸弘，麻生英樹，今泉忠，岩﨑学，大森拓哉（書記），岡太彬訓，菊地賢一，椎名久美子，繁桝算男，鈴木督久，竹村和久，中山厚穂，橋本貴充，林文，星野崇宏，松本渉，森裕一，山岡和枝，吉野諒三，渡辺美智子（20 名），
委任状　4 名
監事　　村上隆
陪席者　倉元直樹（第 42 回大会実行副委員長）

### 資料

1. 2013 年度第 4 回議事録案
2. 2013 年度第 5 回議事録案
3. 還元金予測値リスト
4. 第 42 回（2014 年度）日本行動計量学会大会実行委員会 第 3 回会合
5. 修正スケジュール案
6. 第 1 号通信案
7. チュートリアルセミナー概要
8. 2013 年度総会議事次第
9. 日本行動計量学会平成 25 年度予算
10. 和文誌編集委員会の報告
11. 欧文誌編集委員会資料
12. 広報委員会報告
13. 第 2 次活性化委員会 中間報告
14. Web 選挙投票画面
15. Web 選挙開票画面

### 議事

議事に先立ち，出席者数 24 名（理事出席 20 名，委任 4 名）を確認し，理事会が成立したことを宣言した．

### 1. 2013 年度第 4 回・第 5 回理事会議事録確認および承認

菊地事務局長資料 1，2 にもとづき，議事録案が示され，承認された．

### 2. 第 42 回大会

倉元大会実行副委員長より，資料 4，5，6 にもとづき，大会準備進行状況，第 1 号通信について，等が報告された．また，大会およびシンポジウムの共催について，特別セッションの募集についての相談と協力の依頼があった．

### 3. 総会準備

菊地事務局長より，資料 8 にもとづき，総会の準備について報告があった．また，岡太理事長より，総会の際の理事の対応の在り方を再検討すべきとの意見提案があった．

### 4. 寄附金について

岡太理事長より，柳井晴夫元会員の遺族より寄付を受けたことが報告された．使途については，故人の意思を尊重し，理事会の議を経て，組織検討委員会にて検討することとなった．

### 5. 各委員会報告

・編集委員会

林委員長・和文誌編集委員長より，資料 10 にもとづき，論文投稿状況，特別号について，著作権委譲について，の報告があった．また，植野欧文誌編集委員長の代理として，林委員長より，資料 11 にもとづき，欧文誌の編集状況について報告があった．

・運営委員会

大森委員長より，春の合宿セミナー開催報告（参加者 101 名），第 98 回行動計量シンポジウムの開催報告（参加者 94 名），平成 26 年度研究部会の採択結果報告（研究グループ 1 件，地域部会 1 件），があった．また，資料 7 にもとづき，第 42 回大会時のチュートリアルセミナーについて報告があった．

・広報委員会

松本委員長より，資料 12 にもとづき，通常業務，インターネット関係，会報，年度切り替えによる情報更新，広報関係の英文表記等について報告があった.

・大会担当委員会

森委員長より，第 43 回大会開催校の検討を進めていることが報告された.

・刊行物委員会

山岡委員長より，行動計量学シリーズ全 8 巻の発刊完了予定が報告された.

・第二次学会活性化検討委員会

繁桝委員長より，資料 13 にもとづき，委員案が提案され，承認された．また，意見提言が紹介された.

・事務局

菊地事務局長より，入会の申請報告があり，承認された．また，退会の報告があった．また，資料 3 にもとづき，CiNii の課金の調査結果が報告された．また，資料 14 にもとづき，役員選挙の電子化についての見積もりが報告された．討議の結果，従来通りの方法で行うこととなった.

6. その他

・横幹連について

今泉担当理事より，費用対効果がないことなどを考慮して, 3 月 31 日付で退会届を出したことが報告された.

・DOI について

岩崎理事より, DOI（Digital Object Identifier）の登録について提案があった.

・次回理事会は平成 26 年 6 月 16 日（月）18 時より，大学入試センター3 階視聴覚室にて開催予定.

## 日本行動計量学会 2014 年度第 2 回理事会議事録

日時 : 2014 年 6 月 16 日（月）18 : 00～20:55
場所 : 大学入試センター3 階視聴覚室

議事進行　岡太彬訓理事長
出席者　朝野熙彦，麻生英樹，今泉忠，岩崎学，大森拓哉（書記），岡太彬訓，菊地賢一，椎名久美子，繁桝算男，中山厚穂，橋本貴充，林文，星野崇宏，松本渉，森裕一，山岡和枝，吉野諒三（17 名），委任状　6 名
監事　　村上隆
陪席者　倉元直樹（第 42 回大会実行副委員長）

### 資料

1. メール審議 1
2. メール審議 2
4. 第 42 回大会実行委員会報告
   4-1. 第 3 回実行委員会議事録
   4-2. 第 2 号通信（郵送）（確定版）
   4-3. 協賛申込み
   4-4. 特別セッション企画リスト
   4-5. 会場
5. 平成 25 年度決算案
6. 平成 26 年度予算案
7. 総会次第
8. 平成 25 年度事業報告
9. 平成 26 年度事業計画
10. 長期滞納者数
11. 退会処分についての通知（2011 年 7 月）
12. 欧文誌編集委員会資料
13. 広報委員会報告
14. 行動計量学会組織検討委員会からの理事会への報告
15. 第二次学会活性化検討委員会 報告
16. 和文誌編集委員会の報告

### 議事

議事に先立ち, 出席者数 23 名（理事出席 17 名，委任 6 名）を確認し，理事会が成立したことを宣言した.

### 1. メール審議報告

菊地事務局長より，資料 1，2 にもとづき，欧文誌編集委員の追加, 会員種別の変更, 2013 年度第 4 回理事会議事録の修正についてメール審議を行ったことが報告された.

## 2. 第 42 回大会

倉元大会実行副委員長より，資料 4 にもとづき，大会準備状況，大会企画内容，申込み状況等が報告された．また，大会担当委員会が必要に応じて援助することとなった．

## 3. 第 43 回大会

森大会担当委員長より，第 43 回大会は首都大学東京にて行うこととなった．また，中山理事より，日程・会場等の報告があった．

## 4. 平成 25 年度決算案・26 年度予算案

監事を代弁し，菊地事務局長より，資料 5，6 にもとづき，問題なく監査が終了したことが報告された．決算案は理事会で承認され，総会にて承認を得ることとなった．予算案についても説明があり，理事会で承認され，総会で承認を得ることとなった．

## 5. 学会賞

繁桝学会賞選考委員長より，回収資料にもとづき，各賞の説明と候補者案が提示され，審議の後，承認された．

## 6. 名誉会員

足立名誉会員担当理事の代理として，菊地事務局長より，名誉会員に柏木繁男氏が推薦された旨報告があり，総会にて承認を得ることとなった．

## 7. 総会関係

菊地事務局長より，資料 7，8，9 にもとづき，総会の議事次第，運営について報告があり，審議を行った．

## 8. 寄附金について

吉野組織検討委員会委員長より，資料 14 にもとづき，柳井晴夫元理事長のご遺族からの寄付について，ワーキンググループを作り時間をかけて検討することが提案され，理事会にて，岩崎理事をリーダーとするワーキンググループが構成され，今後検討進めていくことが承認された．

## 9. 各委員会報告

・編集委員会

林委員長・和文誌編集委員長より，和文誌について，資料 16 にもとづき，現在の論文投稿・審査状況，特集号，発行時期等の報告があった．また，植野欧文誌編集委員長の代理として，欧文誌について，資料 12 にもとづき，現在の投稿状況，特集号，J-STAGE への対応の報告があった．

・運営委員会

大森委員長より，第 99 回行動計量シンポジウム開催について，次回春の合宿セミナーについて報告があった．

・広報委員会

松本委員長より，資料 13 にもとづき，通常業務の報告があった．また，各広報関係の英語表記について，討議が行われた．Web 等を英訳するため，業者に依頼して実施することが承認された．

・組織検討委員会

吉野委員長より，学会行事等への参加身分について，学生はすべて学生扱いとすること，入会において社会人学生会員は本務先を記すこと，発表・参加等で本務先以外を記す場合には理事会への申請を行うこととすることが提案された．

・第二次学会活性化検討委員会

繁桝委員長より，資料 15 にもとづき，提言報告が提示された．各委員会が当該箇所について検討することとなった．

・統計関連学会連合

岩崎担当理事より，コンペセッションの審査委員に今泉理事が推薦され，承認された．

・事務局

菊地事務局長より，入会・種別変更の申請報告があり，承認された．また，退会の報告があった．資料 10，11 にもとづき，長期滞納者の取り扱いについて，現状の報告と前回実施の際の手続きが説明され，例年通り手続きを進めることとなった．

## 10. その他

次回理事会は平成 26 年 9 月 3 日，東北大学にて開催予定．

## 関連学会等カレンダー

＜学協会大会・定例シンポジウム等＞
（開催日順に掲載）

**☆SCIS&ISIS2014**
**Joint 7th International Conference on Soft Computing and Intelligent Systems and 15th International Symposium on Advanced Intelligent Systems**
開催日：2014 年 12 月 3 日～6 日
開催場所：北九州国際会議場
http://www.scis2014.org/

**☆The 7th International Conference of the ERCIM WG on Computational and Methodological Statistics (ERCIM 2014)**
開催日：2014 年 12 月 5 日～8 日
開催場所：University of Pisa, Italy
http://www.cmstatistics.org/ERCIM2014/

**☆ソーシャル・キャピタル研究会**
開催日：2014 年 12 月 13 日　13：00～17：30
開催場所：日本大学法学部図書館 7 階マルチメディア教室

**☆人文科学とコンピュータシンポジウム 「じんもんこん 2014**
**（日本行動計量学会協賛）**
開催日：2014 年 12 月 13 日～14 日
開催場所：国立情報学研究所
http://jinmoncom.jp/sympo2014/

**☆第 25 回日本疫学会学術総会**
開催日：2015 年 1 月 21 日～23 日
開催場所： ウインクあいち
演題提出締切：2014 年 9 月 18 日
http://www2.convention.co.jp/jea25th/

**☆第 9 回日本統計学会春季集会**
開催日：2015 年 3 月 8 日
開催場所： 明治大学中野キャンパス
演題提出締切：2015 年 2 月中旬（予定）

**☆社会言語科学会第 34 回大会**
開催日：2015 年 3 月 14 日～15 日
開催場所：東京女子大学
http://www.jass.ne.jp/another/?page_id=2

**☆数理社会学会第 59 回大会**
開催日：2015 年 3 月 14 日～15 日
開催場所：久留米大学御井キャンパス
演題提出締切：2015 年 1 月 5 日～15 日
http://www.jams-sociology.org/?p=1208

**☆日本発達心理学会第 26 回大会**
開催日：2015 年 3 月 20 日～22 日
開催場所：東京大学本郷キャンパス
https://confit.atlas.jp/jsdp2015

**☆第 10 回日本感性工学会春季大会**
開催日：2015 年 3 月 28 日～29 日
開催場所：京都女子大学
演題提出締切：2014 年 12 月 2 日～2015 年 1 月 23 日
http://www.jske.org/taikai/jske10s/

**☆AAPOR 70th Annual Conference**
開催日：2015 年 5 月 14 日～17 日
開催場所： Westin Diplomat Resort & Spa, Hollywood, Florida
http://www.aapor.org/AAPOR_Annual_Conference.htm#.UoIK3OKGdzQ

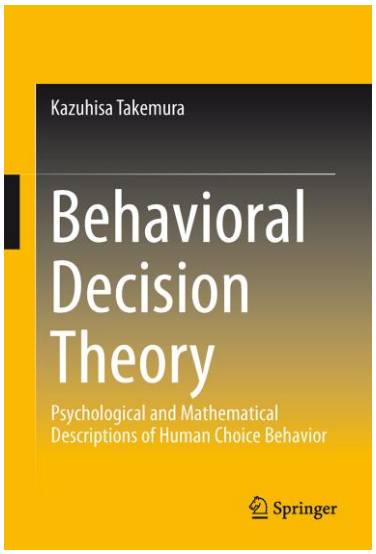
**☆2015 年度統計関連学会連合大会**
開催日：2015 年 9 月 6 日～9 日
開催場所：岡山大学津島キャンパス

**☆第 31 回国際心理学会**
**31th International Congress of Psychology（ICP2016）**
開催日：2016 年 7 月 24 日～29 日
開催場所：パシフィコ横浜
演題提出締切：2014 年 9 月 1 日～2015 年 5 月 1 日
http://www.icp2016.jp/

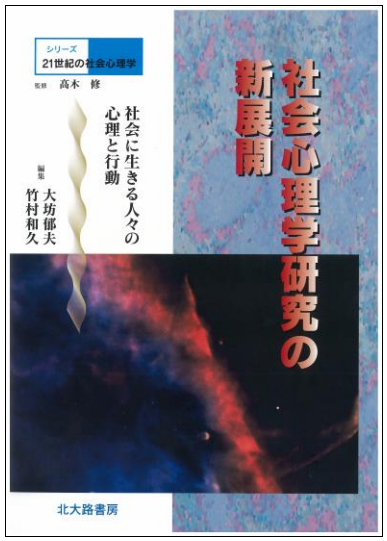
☆The 21th　IEA World Congress of Epidemiology (WCE2017)
開催日：2017 年 6 月 25 日～27 日
開催場所：大宮ソニックシティ

## 会員の著書等

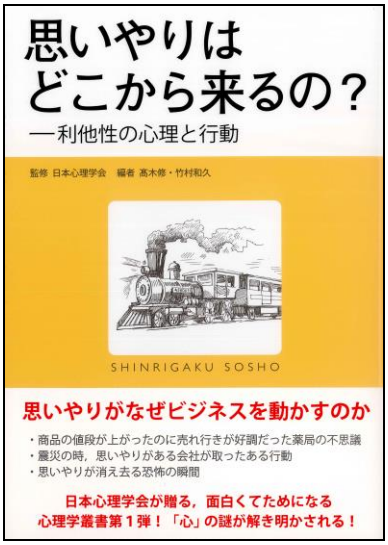
Kazuhisa Takemura, *Behavioral Decision Theory: Psychological and Mathematical Representations of Choice Behavior*. Springer　March, 2014



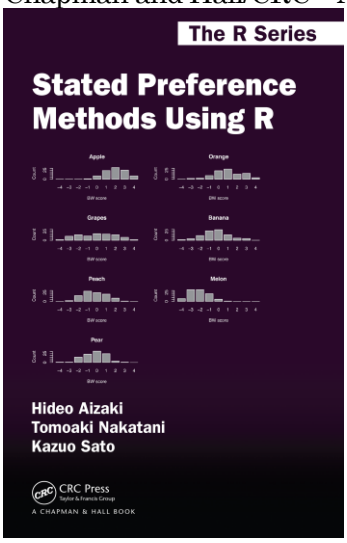

大坊郁夫・竹村和久（編著）『社会心理学研究の新展開－社会に生きる人々の心理と行動』　北大路書房，2014 年 3 月




高木修・竹村和久（編）『思いやりはどこから来るの？－利他性の心理と行動』　誠信書房，2014 年 3 月

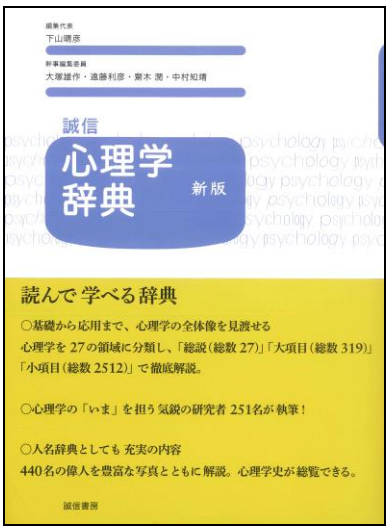



Hideo Aizaki, Tomoaki Nakatani, Kazuo Sato, *Stated Preference Methods Using R*. Chapman and Hall/CRC　August, 2014

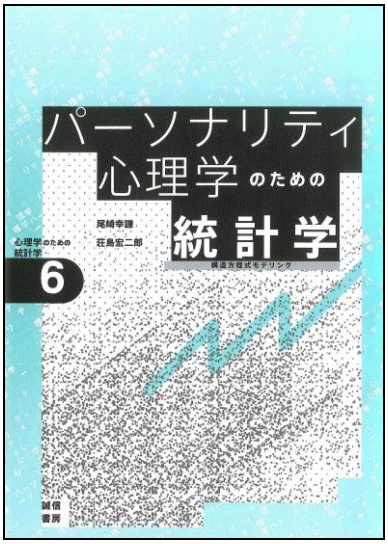


川端一光・荘島宏二郎（著）　『心理学のための統計学 1　心理学のための統計学入門』　誠信書房，2014 年 8 月

下山晴彦（編集代表）・大塚雄作・遠藤利彦・齋木潤・中村知靖（幹事編集委員）　『誠信　心理学辞典[新版]』　誠信書房，2014 年 9 月

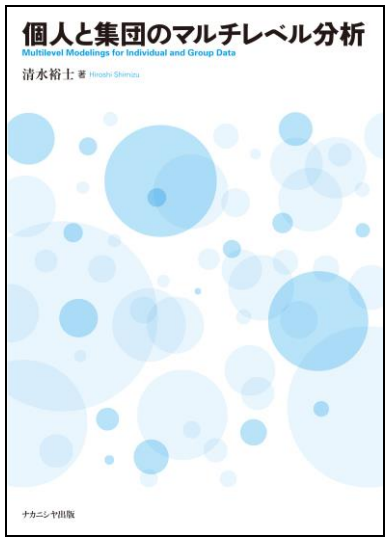



尾崎幸謙・荘島宏二郎（著）　『心理学のための統計学 6　パーソナリティ心理学のための統計学』　誠信書房，2014 年 9 月

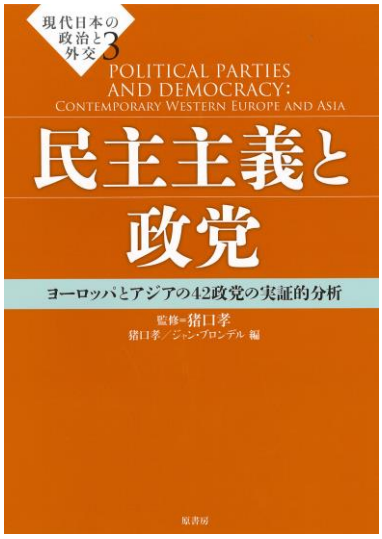



石井秀宗（著）　『人間科学のための統計分析―こころに関心があるすべての人のために―』　医歯薬出版，2014 年 9 月

清水裕士（著）　『個人と集団のマルチレベル分析』　ナカニシヤ出版，2014 年 10 月




猪口孝，ジャン・ブロンデル（編）　『民主主義と政党ーヨーロッパとアジアの 42 政党の実証的分析』　原書房，2014 年 10 月

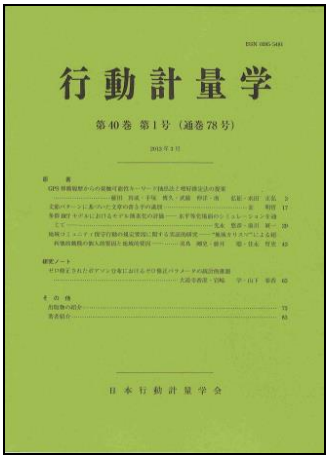



## 学会誌論文投稿先

学会大会で発表された研究などをできるだけ論文として投稿して下さい．お待ちしております．

**和文誌：「行動計量学」**

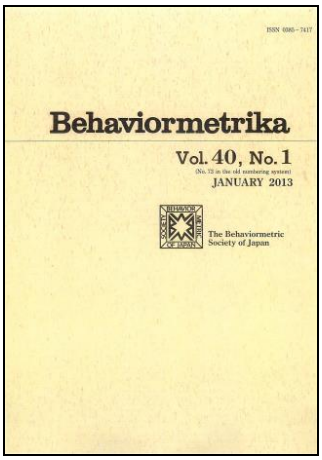
〒162-0801　東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター　日本行動計量学会
林　文　和文誌編集委員長 宛
E-mail: jbehaviormetrics@gmail.com




(DOI) http://dx.doi.org/10.2333/jbhmk.XX.YY
(JOI) DN/JST.JSTAGE/jbhmk/XX.YY
注)XX: 論文掲載の巻 No. ,YY: 論文の開始ページ No.

**欧文誌：「Behaviormetrika」**

〒182-8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1
電気通信大学大学院情報システム学研究科
植野　真臣　欧文誌編集委員長宛
E-mail: ueno@ai.is.uec.ac.jp




(DOI) http://dx.doi.org/10.2333/bhmk.XX.YY
(JOI) DN/JST.JSTAGE/bhmk/XX.YY
注)XX: 論文掲載の巻 No. ,YY: 論文の開始ページ No.¥

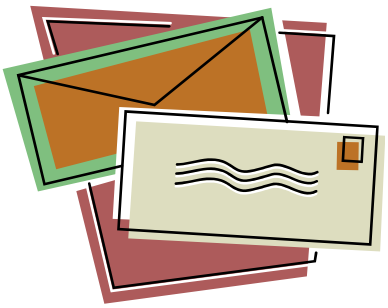
## 既刊論文の電子化に伴う著作権委譲手続きについて

日本行動計量学会では，独立行政法人科学技術振興機構（以下，JST）の支援を受け，本学会欧文誌「Behaviormetrika」および和文誌「行動計量学」に掲載された論文記事を創刊号(1974 年)に遡って電子化し，JST で運用している電子アーカイブサイト J-STAGE（Journal@rchive）にて全文公開(無償での公開)しております．電子アーカイブ化・公開には，創刊号からの掲載論文の著作権行使（全文電子公開）同意を論文著者から得る必要があります. 1999 年の総会以降刊行された論文については，著作権は日本行動計量学会に帰属するよう規定が明確に定められましたが，それ以前に掲載された記事等の著作権は，明確に定められておりませんでした．電子化し公開するに当たっては，各論文の著者全員に，本学会への著作権委譲についての文面をお送りし，多くの著者のご了解をいただきました．現在までにお返事をいただいていない著者の論文は，本来は著者からの権利委譲を待つべきですが，「行動計量学」「Behaviormetrika」それぞれ全体の研究上の利便性，研究者の利用の便宜等を考えて，すでに電子化公開しております．著作権委譲についてお返事をいただいていない著者で，電子化し公開することが不都合とお考えの方は，和文誌，欧文誌それぞれの編集委員会までご連絡下さるようお願いいたします．公開を中止するなど，学会として誠意をもって対応いたします．

なお，著作権委譲について行いました手続き等は会報 123 号(2009 年)に掲載され, 学会の WEB ページの「学会誌」の「著作権規定」の欄

http://www.bsj.gr.jp/journal/copyright.html

に掲載されていますのでご参照下さい．



## ご連絡

**日本行動計量学会会員数**（2014 年 11 月 12 日現在）

| | | | |
|---|---|---|---|
| 正会員 | : | 767 名 | （海外 7 含む） |
| 準会員 | : | 40 名 | |
| 名誉会員 | : | 14 名 | |
| 賛助会員 | : | 20 社 | |
| シニア会員 | : | 29 名 | |
| 計 | : | 870 名 | |
| 学会誌等寄贈先 | : | 8 件 | |

### 入会手続き

学会では新入会員を広く募っています．詳しくは，下記までお問い合わせ下さい．

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
日本行動計量学会　会員業務担当　担当：岸
E-mail: bsj-post@bunken.co.jp
Tel. 03-5389-6209　Fax. 03-3368-2822

### 会員向けメーリングリストの登録・変更・削除

本会では，会員向けメーリングリストに登録されたアドレスにメールニュースを配信しています．こちらへメールアドレスを新規登録，変更，削除（メールニュースの配信停止）される場合は，ご自身で，「会員向けメーリングリスト：登録・サービスの詳細」のページ

http://www.bsj.gr.jp/member/ml.html

に接続して，そこの指示にしたがって，マイページにログインして作業を行って下さい．よろしくお願いします．

（注意）2013 年 12 月中旬より配信システムが変更されています．

### マイページへのログイン

マイページへは，＜会員番号＞と＜個人用のパスワード＞を使用してログインします．

### 会員専用ページへのアクセス

学会 Web ページへの「会員のみなさまへ」の会報の「最新版」，「バックナンバー」および「過去のメーリングリストアーカイブ」(過去のメールニ

ュース）のページにアクセスする際には，以下のユーザー名とパスワードの入力が必要となります．

ユーザー名：bsj

パスワード：1973

**求人情報の掲載について**

大学及びそれに準じた組織（国立研究機関等）の教員公募などの求人情報および賛助会員企業・団体の求人情報は，ご依頼に応じて会報やメールニュースの記事としての掲載および学会ホームページからのリンクを行っています．

ただし，会員が所属する企業・団体であっても，当該企業が非会員の場合，かつ大学及びそれに準じた組織（国立研究機関等）でない場合には，求人情報を記事として配信することはできません．配信を希望される場合には，事前に賛助会員になって頂く必要があります．

会報の広告欄への出稿（有料）については，賛助会員であるかどうかにかかわらず，また求人広告かどうかにかかわらず，お引き受けしています．後述する方法で申し込んで下さい．

**会報の広告欄への出稿について**

会報の広告欄へ出稿（有料）される広告は，以下で受け付けています．ただし，広告は，学会の目的に沿うものである必要があります．

〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
日本行動計量学会　会員業務担当　担当：岸
E-mail: bsj-post@bunken.co.jp
Tel. 03-5389-6209　Fax. 03-3368-2822

**会報原稿募集**

広報委員会では，会員の方が最近発行された著書（会報発行日に出版後 2 年を経過しないもの）や，会員に関係があると思われるシンポジウム，セミナー，公募情報（賛助会員企業の求人情報も含む）などの情報を含め，会員の皆様から原稿を募集しております．広報依頼の受付のページ

http://www.bsj.gr.jp/prrequest/index.html

から情報をお寄せ下さい．なお，2011 年度に，日本行動計量学会では「杉山明子賞（出版賞）」が創設されました．出版賞では，出版賞は，過去 3 年程度の間に会員によって刊行された優れた図書の著者・訳者が対象となっています．本会報の「会員の著書等」の紹介コーナーは，会員の方々が著書等を出版されたことをアピールできる数少ない場であると思いますので，優れた書籍の推薦や情報などをお寄せ下さいますようお願いいたします．なお，会員の方がご自身で出版された著書についてご連絡いただく際には，書誌情報とともに(出版社から入手した)書影を後日お送りいただきますので，ご準備下さい．

編集の都合上，発行月（3，6，9，12）の前々月の末日まで(次号 144 号の場合には 1 月末日)にお寄せいただければ，直近号に掲載することが可能です．それ以降に届いたものにつきましては，内容を判断した上で，次号に回させていただきますのでよろしくお願い申しあげます．

不明な点などございましたら，広報依頼の受付のページよりお問い合わせ下さい．

※記事としての求人情報の掲載および広告の掲載は，学会の目的に沿ったものに限ります．

**編集後記**

今号に寄稿いただいた皆様におかれましては，紙面を借りて，お礼申し上げます．お忙しいところ，ありがとうございました．今後も，これまでと同様に皆様からのご意見を参考にしながら，皆様のお役に立てるような魅力ある充実した会報となるように努めていきたいと考えております．ご意見，ご要望，その他会報に掲載すべきと思われる情報などございましたら，広報依頼の受付のページ

http://www.bsj.gr.jp/prrequest/index.html

より，ご連絡下さいますようお願い申し上げます．

（なかやま　あつほ，中山　厚穂）

題字：林知己夫
広報委員会委員長：松本渉
会報作成担当：中山厚穂・阿部貴人・上野雄史・江口幸治・木村邦博・城川美佳・鄭躍軍・朴堯星・星野崇宏・山田剛史
相談役：森裕一

# 第二次学会活性化検討委員会　報告

**委員会委員**

**委員長**

・繁桝算男（帝京大学文学部）

**委員**

・稲水伸行（筑波大学ビジネスサイエンス系）
・岡田謙介（専修大学人間科学部）
・小柴満美子（埼玉医科大学医学部）
・小杉考司（山口大学教育学部）
・清水昌平（大阪大学産業科学研究所）
・荘島宏二郎（大学入試センター研究開発部）
・鶴見裕之（横浜国立大学大学院国際社会科学研究院）
・寺井あすか（東京工業大学大学院社会理工学研究科）
・星野崇宏（東京大学大学院教育学研究科）

## 1. 学会の基本理念について

本委員会では日本行動計量学会の活性化の柱として，基本的理念を次のように整理した．

(1) 組織としての学会の発展：学会が楽しく魅力的で，学会に参加することが日々の研究や実践の糧になることが理解され，結果として，学会員が増えること．

(2) 行動計量学を支える統計理論や技法の発展：行動計量学に関する理論的を深化させ，有効な技法の開発をさらに促進すること．

(3) 社会への貢献：現代社会が抱える諸問題の解決に，行動計量学の発展が貢献すること．また，専門的見地から，問題解決のために望まれる意見を社会に対して発信すること．

## 2. 学会の活性化のための提言

第二次学会活性化検討委員会は，次にあげる項目ごとに活性化のための具体的方針を提言する．

### a. 組織（総会・理事会・委員会）

**(1) 総会**

総会は，学会の最高の決議機関であり，執行部の方針に対し会員の意思を対置させる機会である．現状では，執行部の方針に対して，対抗する意見やあるいは，将来の活動の新しい展開を示唆する意見などが発言されず，生産的な議論の場になっていない．総会には，よい意味での緊張感が必要である．執行部とそれ以外の会員とは異なる立場にあることが明確にわかる会場設営と運営をすべきである．生産的な議論が行われない一つの原因は，執行部以外の参加者が少ないことである．執行部以外の会員の参加者を増やすためには，総会参加への敷居を低くすることが望ましく，総会参加に対してなんらかのインセンティブを設定することも考えられる．例えば，ランチミーティングとして昼食を用意する，懇親会の前に開くようにして出席への意欲を共に高めるなど，何らかの対策をとるべきである．

**(2) 理事会**

理事の選挙について執行部の新陳代謝の促進の観点から，現状の問題点を吟味する必要がある．会員の自由な選挙を重んじ，理事の構成も会員の意思によって変化が生じるべきなのは基本である．しかし，理事等の固定化が憂慮される場合には，新陳代謝を促すために，例えば，連続した多選の禁止（例えば 3 期以上連続する再任の禁止）などの措置などについても検討すべきである．

**(3) 委員会**

行動計量学会における委員会の構成は比較的単純であり，整理統合の必要性はあまり感じられない．ただし，編集委員会は，欧文誌編集委員会と和文誌編集委員会に分かれており，行動計量学会の規模において，別々に編集作業を行う方が良いか，統合したうえで柔軟に任務を分ける方がいいかは一度検討しても良いと思われる．

### b. 広報

会員外への情報発信の主力は，学会のウェブサイトであるが，これは学会員だけへのサービスではなく，広く社会への広報であることを意識して，一般の人が訪れてみようという気になるような魅力の溢れるサイトを目指すべきである．具体的には，

(1) 会員の著作，公募情報の掲示，他学会や関連する研究会等のイベントカレンダーの広報を充実させる．

(2) 会員が気楽に投稿できる公的ブログサイトを開設し，行動計量学の知識を共通の基盤として，多様なトピックについて活発に議論ができる場を提供する．

(3) 統計に関する FAQ 掲示板を開設し，統計に関する疑問に答える．これは基本的には会員へのサービスであるが，非会員からの疑問に対しても，この疑問を取り上げるかどうかの取捨選択をするという条件ならば，対応することも考えられる．

(4) フェイスブックなどの SNS を積極的に活用して，学会が広く社会とコミュニケートできるようにする．

### c. 大会・シンポジウム・合宿セミナー・研修会

行動計量学会の主要な学術活動に関して，次のような提案をする．

**(1) 年次大会**

年次大会は，学会活動の中心に位置付けられている．専門雑誌が充実し，かつ，ネットから多すぎるほどの情報が得られる時代であっても，個々の学問分野の発展のためには，対面的なコミュニケーションが必要である．対面的状況における議論や意見の対立，新しいアイデアの開陳などは，創造的な研究への強い動機付けとなる．そのために，次のような具体的提案をする．

(a) 年次大会の発表形式として，ポスター発表を採用する．口頭発表とポスター発表は，それぞれ長所短所があり，どちらかに統一するよりも，両者の利点を生かした柔軟なプログラム作りが望まれる．

(b) 若手研究者の動機づけを高めるために，発表賞を設ける．発表賞の決定には，発表を聞いた多くの人の意見を反映するアンケートを行い，発表賞を選定する委員会は，その結果を参考にし(必ずしも，その結果に従う必要はないが)，各年次大会の発表賞の受賞者を決定する．発表賞の受賞者には，学会誌において研究を発表する特別の枠を設定する．ただし，この場合でも査読の過程を省略しない．

(c) 大会では，行動計量学会らしく，多彩なテーマの研究が聞けるようにするべきであるが，そのための方策として特別セッションを上手に活用することが望まれる．プログラム委員会は，活発な研究グループに企画を打診するなど，特別セッションへの企画を奨励する努力を強化する必要がある．また，特別セッションでは，他学会と合同で企画することも斬新で興味深いテーマによる特別セッションにつながる効果があると考えられる．行動計量学の視点から，他学会での発表論文や大会発表のうち，注目すべきものを見出した場合，その著者を招待する講演や招待シンポジウムを行動計量学会で企画することも有効であろう．

(d) 大会の役割は，公式的な発表と討論だけに意味があるのではない．何気ない会話や議論が創造的な仕事につながる場合がある．その意味で，若い人を中心として，多くの会員(および非会員)が懇親会に集うことは重要である．懇親会への参加を促すために，会費の一部を割き，懇親会に対する補助をすることも考えられる．

**(2) 講演会･シンポジウム**

講演会やシンポジウムは，行動計量学の観点から，特に議論の焦点となっているテーマを選び，そのテーマに関する多くの研究が生まれることを促す役割がある．講演会やシンポジウムには刺激的でチャレンジングなテーマを求めるべきである．一方で，一般社会が興味を持ち，かつ，現実的な問題の解決に資するために，行動計量学の持つ技術や知識を社会に伝えるための，時宜を得た企画をすることも必要である．

**(3) 春の合宿セミナー**

現状では，一連のテーマを集めた講演会のような行事になっている感がある．春の合宿セミナーを通して，長期間にわたる研究プロジェクトチームが発足するような，参加者間の関係性が強くなる合宿セミナーを計画することを提案したい．そのためには，当初この企画が発足したときのように，参加者の数は少なくとも合宿を通して参加者間の連帯感が生じるような，文字通り合宿をするセミナーが望ましい．また，合宿セミナーの運営を若手に任せることもよい効果を生むのではないかと考える．

**(4) 研修会**

行動計量学が持つ技術を，希望者に伝授する研修会を積極的に行うことを提案する．この研修会は有料とするが，研修会の参加費は若干高めの額を設定してもよいのではないかと思われる．ある程度の額の参加費を払った受講者は，きわめて動機付けが高くなる．また，その参加費に見合うような価値のある技術や知識を受講者に学習させるためには，教授者の側のしっかりした準備も必要である．学会の観点から言えば，そのような参加費を払ってでも受講したくなるような技術や知識を学会が持っているかどうかを自問しなければならない．ただし，会員に対する参加費は，非学会員と差別化し，参加しやすくする．

**d. 学会誌・会報・刊行物（会員への発信）**

人的リソースなど必ずしも十全ではない現状に鑑み，それぞれの担当者が努力されていることは理解できるが，なお一層の改善を目指して次のような提案をする．

**(1) 学会誌**

(a) インパクトファクターが付与されるように努力する．「インパクトファクターが高い雑誌でなくては投稿しない」という意識が研究者の間で高まっている．投稿数を増やすためにも，インパクトファクターのつく雑誌を目指す必要がある．

インパクトファクターがつくための条件および Web of Science に登録される条件は「発行に遅れがない」などいくつか基準があるが，実際には有名な大手から出版する場合，Web of Science 登録のための改善策が提示され，トムソンロイター社との交渉を委託することが可能である．なお，この登録は和文誌でも可能であり，現状では和文誌の登録数は少なく，行動計量学のためにはチャンスかもしれない．

(b) 審査期間を短くする必要がある．他学会の現状を見ても，審査期間が短くないと投稿されない傾向がみられる．そのための方策はいろいろあるが，締切りを過ぎても審査結果が返ってこない査読者は締切りの時点で査読を辞退したとみなすべきである．査読者をどのようにして確保するかという問題も生じるが，その問題と比較しても，審査期間を短くすることの重要度の方が高い．査読者を多めに頼んでおき，締め切りに遅れた査読者の意見は(必然的に)考慮しないというルールも考えられる．

(c) より多くの投稿を促す方策を考える．一つの案として，行動計量学，および，Behaviormetrika を想定した論文の書き方を指導するセミナーを企画することが考えられる．このセミナーは，優秀な発表等を基準に一定程度の数の

若手の研究者の候補者を対象とする．例えば，先に提案した大会発表賞の受賞者や推薦のあった大学院生である．このセミナーでは，参加者はあらかじめ論文を用意しておき，中堅研究者とともに論文の内容や書き方について議論する．また，審査のシミュレーションなどを行うなどが考えられる．特に，大学院生に対する働きかけを重視するが，その理由は，最初の査読論文が行動計量学会の学会誌である場合，学会への帰属意識が持続すると考えるからである．

**(2) 会報**

会員が読みたくなるような魅力ある，そして，実際に役立つ情報を持つ会報を期待する．会報のビジュアル化についても一層の努力を期待したい．

**(3) 刊行物**

行動計量シリーズのような，時宜を得た出版企画を学会が行うことが望ましい．それが，行動計量学に関する良質な出版を多くする道につながる．

**e. 表彰制度**

前述したように，学会への帰属意識や，大会への参加動機を高めるため，発表賞を創設する．また，社会とつながる行動計量学会の設立趣旨に鑑み，実践賞の創設を提案する．実践賞は，データ解析を通じて，社会的に意義のある大きな成果を得た研究を表彰するものである．すでに，日本地域福祉学会・日本経営工学会・日本農業経営学会・大学英語教育学会・日本行動分析学会などでは，学会の定める優れた実践を行った主体について，実践賞を贈る制度がある．また，データ解析コンペティションを企画し，優秀者を表彰することも考えられる．

**f. 国際化**

国際的なプレゼンスを高めるために，海外の学会との連携を深めることが望ましい．その一環として，大会において，海外学会との共同企画のシンポジウムなどが奨励することが考えられる．また，大会において，一定の割合で，英語で発表し議論するセッションがあってもよいと考える．

**g. 研究部会**

行動計量学会では，研究活動の活性のために研究部会を設け，公募によって研究グループと地域部会を募集している．これはアイデアもよく，行動計量学会の地域的な活動を活性化し，萌芽的な研究の芽を育てる役割として期待される．しかし，現状では，会員の関心もそれほど高くはなく，せっかくのシステムが十分に活用されていない．この原因を探り，真に魅力のある研究助成システムになることが期待される．

**h. その他**

電子化はそれぞれの案件で共通する課題であるが，学会でプロジェクトチームを作り，総合的に学会の情報化について検討することが望ましい．その一例として，統計関連学会で統一された電子投稿システムの構築について議論することが考えられる．

## 3. 行動計量学の各分野及び関連する分野の現状と課題

行動計量学とは，複数の分野が融合した学会であるために行動計量学が新しい方法論を創造し，他の学問分野に拡大浸食することもあれば，新しく生まれた方法論が分離独立することもある．そこで隣接学問分野の状況を整理し，行動計量学がそれぞれの分野で発展するテーマやアプローチを整理する．隣接諸分野をいくつかに分類し，それぞれに担当者を置き，署名入りの提言とする．ただし，これらの提言は署名付きとはいえ，委員会の議論を経て，コンセンサスを得た提言である．

### a. 社会学（社会調査を含む）　（小杉）

**1 現状**

社会学分野における研究手法において，本学会と関わるデータを扱う領域は，主に次の三つである．

(1) 事例研究　当事者や関係者に対する聞き取り調査
(2) 日本版総合的社会調査(JGSS,[1]) や社会階層と社会移動全国調査(SSM,[2]) のような，大規模調査
(3) 白書等官公庁の出す統計資料に基づく分析

ここで，事例研究はインタビューの一言一句を丁寧に読み取り，特に意味解釈に踏み込むような研究が多く，数量的側面に重きを置いたテキストマイニング的アプローチをするものは少ない．社会学領域で特徴的なのは，例示したような大きな研究チームによる社会調査アプローチで，項目の選出やサンプリング手続きに大きなコストをかけることで，より洗練されたデータを収集しているところである．これらのデータは，アーカイブとして公開されることが多く[1, 4, 5, 6]，サイト上で組み込まれた統計パッケージによって分析までできるものもある．公的な資料は総務省統計局で公開されており，申請によって二次利用可能なものもある．

一方，数理社会学や社会心理学的領域にまで目を向けると，最近の動向として次のような特徴が見られる．

(1) web 調査によるデータ収集
(2) パネル調査によるデータ分析
(3) twitter などインターネット上のデータにアクセスする API を活用して得られるデータ収集

第一の Web 調査については，調査会社が Web 上から回答できる Web ページをデザインし，調査会社に登録した参加者に回答を募ってデータを収集するものである．実際に利用すると，回答項目や Web ページのデザインにもよるが，数十万円のコストで約百項目×数百人分の回答が数日のうちに得られる．現在，心理学系雑誌掲載論文の約一割はこうしたデータである．パネル調査の代表例は Japanese Life Course Panel Survey[7] で，追跡調査による時系列的な視点が大規模調査の中に取り込まれている点が特徴的である．

昨今では，インターネット上にあふれる言説をデータ化して分析することも注目を集めている．こうしたデータはいわゆるビッグデータの一つで，昨今では NHK などの報道機関でもトレンドを測定する指標として用いられている．

**2 課題と提案**

研究室単位の事例研究や調査研究がなくなるわけではないが，社会学領域においては大規模調査が社会調査の王道であり，また同時にインターネットを使った低コスト化も進んでいるようである．

こうしたデータを分析するにあたっては，いかに無駄なデータを捨象し意味のあるデータを掘り出すかが注目され，統計モデル的観点からは

1. 大規模データを処理するための事例的ノウハウ（アルゴリズム開発含む）
2. 傾向スコアなどによるサンプルのゆがみの補正
3. 累積的，あるいは追跡データ(パネルデータ）についての統計モデル
4. 二値変数，順序変数，打ち切りデータについてのさらなるモデル的展開
5. 事例研究などの領域における統計的アプローチ

などの需要が見込まれる．

こうした需要に対して，本学会から知識や技術，新しいモデルの提供などの貢献が可能であると思われ，領域を超えた交流を積極的に進めていくべきではないだろうか．

**参考文献**

[1] 東京大学社会学研究科附属社会調査・データアーカイブ研究センターhttp://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/
[2] 2005 年社会階層と社会移動調査研究会　http://www.sal.tohoku.ac.jp/21coe/ssm/
[3] 総務省統計局　http://www.stat.go.jp/index.htm
[4] SSJ データアーカイブ　http://issnews.iss.u-tokyo.ac.jp/ssj/
[5] 社会・意識調査データベース　http://sord-svr.sgu.ac.jp/
[6] 質問紙法にもとづく社会調査データベース http://srdq.hus.osaka-u.ac.jp/
[7] 社研パネル調査プロジェクト(2014) 働き方とライフスタイルの変化に関する全国調査 http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/JLPSYM/

**b. 教育　（荘島）**

**1 現状**

教育データ解析・テストデータ解析においてもっとも中核的な技術分野は，テスト理論（古典的テスト理論・項目反応理論）の理論研究および応用研究である．標準化（尺度化・等化）したテストを用いて学力を診断する自治体が増え，また，その影響により，標準化テストを運営する民間企業も増えてきている．さらに，情報技術（コンピュータや端末機器）の進歩とあいまって，今後数十年間，コンピュータに基づくテスト（computer-based test, CBT）あるいは，コンピュータ適応型テスト（computer adaptive test, CAT ; 植野・永岡, 2009）の需要は日増しに強まっていくと予想される．

特筆すべきは，情報技術の進展によって，いろいろな能力測定の可能性が開けてきたことである．例えば，英語テストでいえば，従来は，reading と listening が主要な測定対象であったが，携帯情報端末を用いることで，writing や speaking を測定対象とすることもできるようになった． また，顕微鏡の操作手順（理科）を画面上で実行させたり，歴史上の事件を動画で見せて回答させたりなど，項目形式を豊かにすることができる．

長年，教育データ解析，特にテストデータ解析方法の新しい提案や洗練は，行動計量学会，教育心理学会や日本心理学会の貢献が大きかった．しかし，近年では，これらの分野に関する発表件数が少なくなってきている．それは，日本テスト学会の創設により，テスト理論の理論研究・応用研究を行う研究者の本学会への積極的参加が減少したからである．また，CBT や CAT などに関連する情報技術は，教育工学会の存在により，当初から本学会で活発であったとは言い難い．

**2 課題と提案**

本学会が，教育データ解析・テストデータ解析・CAT（CBT）の分野において活性化するには，本学会会員が本学会でそれらの新技術や重要な革新技術を持続的に発表していくことが重要である．本学会の特徴は，分野を問わずデータ解析のプロが集うところである．したがって，異分野間の交流が盛んであるところが，専門領域に特化した学会にはない本学会の強みである．専門が異なる人が出会って交流することで，相互の分野に刺激となるような交流ができる．しかしながら，本学会の大会プログラムは，個別学問分野によってセッションが区切られていることが多い．これは，文脈を共有している人たちの間で議論ができるという長所がある一方で，個別の専門学会でもやれることである．異分野交流という観点でいえば，交流のさまたげとなっている．

手法によってセッションを分けて，似た分析を使っているけれども分野が異なる人でセッションを構成することが

望ましい．そうすると，例えば，医学系・工学系・教育系で，多変量データの次元縮減はどのようにやっているか，などということをきっかけにお互いのもつ技法の長所を交換することができるかもしれない．教育データ解析・テストデータ解析・CAT 等においても異分野交流によって革新技術が生まれてきやすくなると思われる．

**参考文献**

植野真臣・永岡慶三（2009）e テスティング 培風館

**c. 心理学・認知科学　（寺井･岡田）**

**1 現状**

心理学・認知科学の分野において，研究者の主観を排した研究法として行動計量学の知見が用いられており，主に以下に関わる研究に寄与している．

(1) 実験・調査により得られたデータの統計解析

(2) 人の思考・行動等のシミュレーションモデル構築

(1)については，データの構造を明らかにすることや条件群間の差を検定すること等を目的とした利用が多く見られる．(2)については，推定されたパラメータの心理学的意味の検討，異なるモデルのパフォーマンスの比較等により内的メカニズムを解明することを目的とした研究が行われている．(1)と比較し(2)に関わる研究はあまり多くないが，確率モデル・サポートベクターマシン(SVM)等を用いた研究が見られる．

分析に用いられるデータは，Web 調査等による大規模データから，心理実験によって集められる非常にサンプル数が限られたデータまで幅広く用いられている．近年は，測定方法の多様化・高度化に伴い，脳活動データのようにサンプル数は少ないが 1 サンプルが持つ情報量が非常に大きいデータも用いられている．また，コーパス（大規模テキストデータ）を対象とした研究も行われている．

**2 課題と提案**

心理学・認知科学の分野では，実験・調査によりデータを収集し，解析する際に用いられるツールの多様化・高度化が進んでいる．特に，脳科学に関わる研究は増加しており，fMRI(機能的核磁気共鳴法)等を利用して測定されたデータ解析に対する需要が増えることが考えられる．現に，Psychometrika 誌では 2013 年に fMRI データ分析の特集号が組まれている．また，消費者の購買行動に関する研究等で見られるように，ビッグデータを対象とした研究もますます増加していくと考えられる．このような新しい動きに対応するデータ分析技法についての新しい情報の提供や，また必要に応じて有効な分析手法の開発が求められる．

実験・調査データの統計分析においては，長きにわたり仮説検定が支配的な地位を占めてきた．しかし，その濫用の危険に対する批判が近年高まり，いわゆる「心理学における統計改革」が進行している．米国心理学会(APA)の論文作成マニュアル最新版も，「仮説検定は分析のはじまりにすぎず，結果の意味を適切に伝えるためには効果量や信頼区間，結果の詳細な記述が不可欠であることを APA は強調する」と述べている（American Psychological Association, 2009, p.33; 拙訳）．この改革は途上にあり，現代は検定に代わる定番の方法論が存在しない群雄割拠の時代にあり，行動計量学の研究者が問題を整理し，解決策の方向を示すことによってこの分野に貢献することが期待される．

心理学分野の大きな特徴のひとつに，構成概念に対応する意味のある潜在変数を用いたモデリングや予測がある．潜在変数モデリングはそれ自体柔軟なモデル構築を可能にするが，近年には一般化潜在変数モデル（Muthen, 2002）や GLLAMM（Rabe-Hesketh et al. 2004）等さらに一般化を進める試みが提案されている．まだまだこの方向への発展は続くであろう．また，心理学分野では信頼性や妥当性を重視することなど，調査データの扱いについて他分野にはない伝統がある．近年の話題として，中間・媒介変数の影響を考慮したモデリング（Hayes, 2013）や，調査データから因果効果を推定するアプローチ（星野, 2009）など，行動計量学者にとって方法論・応用研究の貢献ができる側面は多いと言える．

他分野に比べ心理学・認知科学分野ではデータの公開・共有が遅れていたが，近年 APA がオープンデータの論文誌 Archives of Scientific Psychology 誌をはじめたり，不正・剽窃への対応としてデータのオープン化が影響力のある論文誌で広く呼びかけられる（Simonsohn, in press）など状況は変わりつつある．こうした流れに我が学会としても適切に対応することが求められるとともに，研究面ではメタ分析などの二次データ利用の方法論の開発・発展が望まれる．

**参考文献**

American Psychological Association (2009). *Publication Manual of the American Psychological Association.* (6 ed). Washington, DC: American Psychological Association.

Hayes, A. F. (2013). Introduction to Mediation, Moderation, and Conditional Process Analysis: Methodology in the Social Sciences. Guilford Press.

星野崇宏 (2009). 調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合. 岩波書店.

Muthen, B. O. (2002). Beyond SEM: General latent variable modeling. *Behaviormetria*, 29, 81-117.

Simonsohn, U. (in press). Just Post It: The lesson from two cases of fabricated data detected by statistics alone. *Psychological Science.*

Rabe-Hesketh, S., Skrondal, A. and Pickles, A. (2004). Generalized multilevel structural equation modelling. *Psychometrika,* 69, 167-190.

**d. 経済・経営　（稲水･星野･鶴見）**

**1 現状**

近年，学術的のみならず社会的にも（特にファイナンス分野などの実務家にも）行動経済学が非常に注目を集めている．例えば，国内では行動経済学会が 7 年前に設立されている（現在会員数 500 名ほど）．

しかし行動経済学という学問領域が確固として存在するというわけではなく，実際にはその学術的な基礎は心理学，脳科学，意思決定研究であり，その応用分野が経済学や経営学，商学分野のトピックであるという点のみが新規的であるといえる．つまり，いわゆる「行動経済学」として認識されうる研究内容は十分行動計量学会においても発表されうるし，行動計量学会の重要な分野の一つであるリスク研究などはほとんど行動経済学研究として発表しうるものである．よって，行動経済学と行動計量学は潜在的な競合関係にあると考えることができる．

行動経済学は社会的にも注目されている分野であり，また中核となる研究者はメディア等でもビジブルであるため，リスク研究のように「いつの間にか行動計量学会が得意としていた学際的研究の重心が行動経済学会に移っていた」という現象が今後生じるのではないかと危惧する．

マーケティング分野では，大量，非定型，かつ高頻度に更新されるビッグデータの活用が課題の 1 つになっている．非定型データであるネット上のクチコミ・データとブランド評価等との関連性を分析する研究が登場しつつある．また高頻度に更新されるデータであるネット上の閲覧履歴と購買履歴データをリアルタイム処理し，ネット上における広告出稿の取引を瞬時に行うリアルタイム・ビッディングなどに注目が集まっている．

経営学分野（経営戦略論・経営組織論）においても，調査先で取得できるデータが爆発的に増加し，従来の分析手法だけでは扱えないケースも増えてきている．例えば，従業員に IC タグをつけて職場での行動・コミュニケーションを分析したり，メールや Web 会議など IT ツールの利用ログを用いた分析をしたりなどである．これらのデータは，経営学で教育を受けてきた学生・教員だとなかなか分析にてこずることが多いようである．

ただ，日本の経営学にやや限定してみると，事例研究法による研究が多くなっている傾向がある．事例研究では，当事者へのヒアリングなど質的データの収集と分析が行われることが多い．そのため，この 10 年ほどで，こうした質的なデータに関する方法論的な議論がされてきている印象が強い．

**2 課題と提案**

行動経済学会に比べた行動計量学会は，前者の会員は経済学者とファイナンス分野の研究者・実務家がほとんどであるのに対して，本学会は様々な領域の会員を有しているという独自性がある．具体的には，1)会員にマーケティングや市場調査分野の実務家がおり，大会に参加し，学会誌を読んでいること，2)医学看護分野の会員がいること，3)神経経済学などといった分野も出現しているが，まだまだ行動計量学会の方が脳科学に対するアクセスがよいこと（脳科学分野の研究者の会員がいる，会員が共同研究を行っているなど），などである．

共同研究はそもそも各自の関心に応じて行われるのが自然であるが，行動計量学会は様々な分野の会員を有しているにも関わらず，その資源が活かしきれておらず，共同研究を生み出す場として十分に機能していないように思えるのは大変残念である．学会として研究者間のマッチング機能を持つことが今後の学会活性化にとって重要であろう．

マーケティングや経営学は，計量的手法の開発と言うよりも，手法を利用する側にある．特に，経営学は，他の分野に比べてかなり遅れて新しい計量手法が取り入れられるような分野である．ただし，新しい手法に対してニーズが高いのも確かである．つまり，行動計量学会に所属することで，様々な新しい手法を学べる機会を持てると言うことを，経営学の研究者にアピールすることで高い関心を呼び起こすことができる可能性が高い．上述のように，質的なデータの分析手法について，行動計量学でもカバーできるようになれば，経営学分野からの関心はかなり高まるのではないかと推測できる．

その一方で，マーケティング・経営学分野は実証研究が主であるため，企業などのビジネス実務家との結びつきが強く，新しい手法を適用するにはよいフィールドを多く持っていると言える．例えば，経営学系の学会（ビジネス・実業界）とコラボレーションすることで新発見が得られる可能性もあるほか，実務での問題解決に役立つことを対外的にアピールしやすくなるため，学会活性化の呼び水になると考えられる．

**e. 医学・生物・薬学　（小柴）**

**1 現状**

行動計量学会は，最も広い意味での人間の行動に関する計量的方法の開発と，そのさまざまな分野への適用について研究すること，計量的方法の普及ならびに研究者相互の連絡・協力を促進すること，研究成果を社会に還元すること，を目的とする学会と規定されている．医学・薬学・生物学分野においても今後本学会が大きく貢献することが期待されるが，そうした方向で改めてこの規定を読み直してみると，やや活動の領域が限られている．なぜならば，医学・薬学・生物学分野で扱う人間の行動で思い浮かぶ現象は，医師・薬剤に対する消費者行動，フィールド調査における活動などであるのに対し，医学・薬学ではその主領域においてはマウスやラットなどの実験動物，生物学・生態学においてはヒグマやウサギなどの野生動物，カイコやショウジョウバエなどの昆虫，さらにはウイルスやバクテリアなどを扱う研究の方が多いからである．

近年隆盛する学問のひとつ，精神生物学では，動物の行動に影響を与える分子，エネルギーなどの刺激と応答の関係を調べることで，主観でしかとらえることができないと考えられていた情動・心理機能の物理的説明を見出すようになって来た．特に複雑なメカニズムにより機能すると考えられている精神・心理活動の出力である行動は，複数の情報の相互関係の構造が神経ネットワークとして想定されるように，多角的に情報を捉えることではじめて識別され

るようになる．人間の精神・心理の生物メカニズムは，人間ではなく，動物の行動研究によって，はじめて解明されたことが多い．未熟な状態で誕生した，より単純な幼若生物が，生体同士の社会環境や，感覚器を通して環境から物理情報を受容し，相互作用しながら，末梢と中枢の神経回路を自ら育む．母語獲得のような，ある特定の時期に高感受性期となる生物分子プログラムの中で，神経細胞などにおける物理的変化により情報を記憶し，やがて，複雑な行動を出力するようになる．行動から記憶され遺伝子の制御により形質が次世代に伝わる，生物進化も起こる．これらの生涯の発達過程を計量し，物理学や統計数理により構造の理解を進めることで，複雑で解くことはできないと思われていた，精神・心理の神経系機能の基盤 が，動物行動の研究によって，少しずつ，確実に，解明されて来るようになった時代であると考える[1-12].

**2 課題と提案**

上記現状を考えると，医学・薬学・生物学分野に本学会が真に貢献するためには，動物行動の計量的方法の開発も守備範囲に入れることが不可欠のように思われる．医学・薬学はヒトの健康と安全を追究する．そのために，生体の生命活動のからくりを知ることが求められる．これに対して生物学は生物そのものを知ることが目的となる．

本学会は人間を対象としているため，短期的には医学・薬学への貢献が期待される．すなわち，動物の行動の測定を通して，ヒトに対する医療の効果，薬剤の効果，副作用などを推し量る分野への貢献である．動物行動と内分泌，血液，脳画像の測定を通して，脳神経活動とその発達を推し量る分野への貢献である．

特に，精神生物学における行動計量は，これまで薬剤の投与や外科的介入を主体して来た医学において，「病は気から」といわれることわざを想起させ，行動そのものにより，投薬や栄養支援とのバランス調整を伴い，代謝系，免疫系，神経系などの生物基盤を活性化させることができる包括的療育介入の新たな時代を導く可能性がある．動物行動計量が精神神経生物学，および，教育学，心理学，社会学，経済学，工学などの多領域間の境界をつなぐことで，革新的な学際領域の活性化を導く可能性を提案したい．

**参考文献**

[1]日本神経科学会　http://www.jnss.org/
[2]日本神経精神薬理学会　http://www.asas.or.jp/jsnp/
[3]日本生物学的精神医学会　http://www.jsbp.org/
[4]日本分子生物学会　http://www.mbsj.jp/
[5]日本生理学会　http://physiology.jp/
[6]日本小児神経学会　http://child-neuro-jp.org/
[7] 日本磁気共鳴医学会　http://www.jsmrm.jp/
[8] Society of Biological Psychiatry http://www.sobp.org/i4a/pages/index.cfm?pageid=1
[9] World Federation of Societies of Biological Psychiatry http://www.wfsbp-congress.org/
[10] Society for Neuroscience http://www.sfn.org/
[11] International Society for Neuroethology http://www.neuroethology.org/eBusISNE/
[12] The International College of Neuropsychopharmagology http://www.cinp.org/

**f. 工学　（清水）**

**1 現状**

工学分野と言っても非常に広いので，一概に言うことは難しい．しかし，行動計量学分野と隣接分野の関わりを考える際，工学分野が他の隣接分野と大きく異なる点があるとすれば，それは行動計量学分野が工学分野に方法論を提供する主要な分野ではなくなってきている点だろう．工学分野には，工学分野向けの方法論を提供する工学研究者がいる．行動計量学会大会では，回帰分析や主成分分析に始まり，クラスタ分析や多相モデル，構造方程式モデルやマルチレベルモデルなど多変量解析関係の発表がかなりある．工学分野でも，そのような多変量解析法が使われているし，つくられてもいる．その起源が行動計量学あるいは計量心理学である場合も多い．しかし現在，工学分野からみると，行動計量学会は古典的な多変量解析法を用いて社会科学データを解析する応用研究主体の学会であると捉えられている．新しい多変量解析法がつくられているとは思われていない．そのため，工学分野の研究者が行動計量学会に入会あるいは大会に参加したくなるには，工学研究者にとって魅力的な多変量解析法（の萌芽）を行動計量学会がつくる他ないだろう．行動計量学会は，多変量解析法のチュートリアルや研修セミナーを数多く開催し，ユーザーにとって役に立つ場所になっている．しかし，それと同時に新しい多変量解析法を生み出す場所でもあり続ける必要がある．

**2 課題と提案**

行動計量学会の強みとしては，豊富なモデル群，データ解析経験，学際性が挙げられる．行動計量学が工学分野で発展するテーマやアプローチを見つけるために，学会には，異分野交流を促進するための議論の場を提供してほしい．例えば，工学分野の方法論研究者や応用研究者を招く企画セッションやチュートリアルが行われれば，課題を共有しやすくなるだろう．また，ポスター発表の導入も異分野との交流を図る上で効果があるだろう．異分野の研究は，質疑なしに研究内容を理解するのはかなり難しい．ポスターなら，インフォーマルなコミュニケーションを含め，質疑の時間がかなり取れる．ポスターというと，学生や若手のためという考えもあるようだが，教授層にもポスター発表をして議論に加わってほしい．また，口頭発表でも質疑の時間が十分取れるように発表時間を長くとることも効果的だろう．例えば，発表 20 分質疑 10 分であれば，聴衆が理解を深められるだけでなく発表者もかなりのフィードバ

ックが得られ，発表者へのインセンティブにもなるだろう．

工学分野の方法論研究に比べて行動計量学会の得意とする所は，因果分析であろう [2-5]．工学分野で盛んに研究されているトピックに，因果をキーワードとして新たな発展をもたらせる可能性が行動計量学会にはある．例えば，情報科学・情報工学分野では，推薦システム の研究が盛んに行われている． 代表的な応用例は通販サイトである．購入履歴などを利用して利用者の好みに合う商品を推薦してくれる． しかし，情報分野の従来技術では答えられない実際的かつ根本的な問題があることが指摘されている [1]．具体的には，システムのデザインや学習アルゴリズムの入力あるいは学習アルゴリズム自体を変更することで，ウェブサイトの訪問者の満足度や広告のクリック回数，来訪頻度がどの程度変化するかを定量的に予測する問題が挙げられている．これは，因果関係の予測にあたるため，連関のみを予測する従来技術では不可能である．しかし，システムをデザインする上で非常に有益な情報である．訪問者の満足度や広告のクリック回数，来訪頻度の原因候補は無数にあるため，A/B テストといった無作為割当を伴う方法は現実的ではない．そこで，無作為割当を伴わない受動的に収集されたデータから因果関係を予測する分析技術が求められている [1]．

**参考文献**

[1] L´eon Bottou, Jonas Peters, Joaquin Qui˜nonero-Candela, Denis X Charles, D Max Chickering, Elon Portugaly, Dipankar Ray, Patrice Simard, and Ed Snelson.Counterfactual reasoning and learning systems: The example of computational advertising. Journal of Machine Learning Research, Vol. 14, No. 1, pp. 3207–3260, 2013.

[2] 繁桝算男，本村陽一，植野真臣．ベイジアンネットワーク概説．培風館, 2006.

[3] 星野崇宏．調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合．岩波書店, 2009.

[4] Judea Pearl[著]，黒木学 [訳]．統計的因果推論 -モデル・推論・推測．共立出版, 2009.

[5] 狩野裕．構造方程式モデリング、因果推論、そして非正規性．多変量解析の展開—隠れた構造と因果を推理する，pp.65–129．岩波書店, 2002.

**付記：若手研究者への魅力を高めるための取組**

毎年少しずつでも若手の会員数が増えないと学会の長期的な発展は望めない．活性化について考える報告書全体に関連することであり，特に若手の入会を促進する魅力を高めるための仕掛けについて議論したので付記にて報告する．以下のことは，基本的には報告書本文で既にふれられていることであるが，若手研究者に焦点を当てて記しておく．

**(1) 若手研究者の力を引き出す．**

この報告書が提案するようなすべての事案について，若手研究者の発想が生かされるように配慮すべきである．行動計量学会は，もともと，30 代の当時の若手研究者が中心となって誕生した学会であり，時代の動きに反応する若手研究者の敏感な感性が，学会のもろもろの企画に反映されるように，意思決定のシステムを構築することが望ましい．

**(2) 若手研究者を積極的に評価する**

本文で書かれているように，新しく提案する発表賞については，もともと若手研究者を対象とすることが想定されている．実践賞に対しても，若手を重視する姿勢を打ち出してもいいかもしれない．現在 4 つある賞のうちの奨励賞と連動して，総合的に優れた業績に対する賞というよりも，将来性を重視して評価することが若手研究者を成長させる要因となるであろう．

**(3) ソフトウェア開発を高く評価する**

現在の環境に適したソフトウェアを作るのは 20 代 30 代の研究者が多いと思われる．ソフトウェア開発を積極的に評価し，行動計量学会を発表の場として活用できるようにすることや，学会機関誌がソフトウェア開発に関する論文の有力な投稿先になることが望ましい．開発されたソフトウェアは，学会 HP で紹介し，広く利用されるようにする．また，優れたソフトウェアの開発は，当然，実践賞の対象となる．

**(4) 若手に対する経済援助を実施する**

若手に対する経済支援（大会参加費と懇親会参加費の補助）を検討してほしい．例えば，大会で発表した若手には，懇親会費を割引することも考えられる．また，学会の財政的基盤を確立することが必要条件であり，それを前提としてではあるが，若手研究者の国際大会参加への援助やプロジェクトへの援助なども実現することを期待したい．

本文中に取り上げた研究部会という制度を十分に機能させるためにも，若手研究者の研究促進という側面を重視するとよいと考える．学会の現状からみて，研究助成額としての活動経費の支給が大幅に増えることは現実的ではないが，学会活動との絡みで，この研究部会に採用されることが，若手研究者のキャリアパスにおいて多くの利点を生じるような権威を持つことが望ましい．

**(5) 若手の間のコミュニケーションを活発にする**

行動計量学会であつかう研究テーマは，若手にとって身近に相談相手がいないことも多い．適切な出会いや助言がないことによって，若手が行動計量学に対する志をあきらめることがあれば非常に残念なことである．本文で提案されているブログサイトは，若手研究者のみを対象とするものではないが，全国の若手研究者をつなぐために，若手同士が議し，研鑽する場になることを期待する．

# 2014 年度統計関連学会連合大会の報告

2014 年度統計関連学会連合大会
運営委員会委員長　山田　剛史（岡山大学）
実行委員会委員長　大森　裕浩（東京大学）
プログラム委員会委員長　西郷　　浩　（早稲田大学）

## １．大会概要報告

山田 剛史（岡山大学）

2014 年度統計関連学会連合大会は, 2014 年 9 月 13 日（土）より 16 日（火）にかけて，東京大学本郷キャンパスにおいて開催されました．本大会は，応用統計学会，日本計算機統計学会，日本計量生物学会，日本行動計量学会，日本統計学会，日本分類学会，統計教育大学間連携ネットワーク（略称 JINSE）の共催により開催しました．

参加者総数は 1034 名（チュートリアル参加者数 223 名，大会参加者数 811 名）の参加がありました． 発表件数も 318 件（取り消しを除き、特別セッションでの報告を含む）にのぼり，大変，盛大な大会となりました． 懇親会は東京大学山上会館で行われ，多数の参加者で盛会でした．

本大会は，実行委員，プログラム委員，運営委員などの無償のボランティアで運営されました．各委員の負担軽減のため，一部事務局業務について外部委託を行っておりますが，皆様のご理解をいただければ幸いです．

また，講演者，座長，企画セッションオーガナイザー，出席者の皆様には，深く感謝申し上げます．連合大会でアルバイトをしてくださった学生の皆様，ご協力有難うございました．

運営担当者の一員として，本大会が無事に終了したことは，大きな喜びであり，組織委員長をはじめ関係者の皆様のご尽力に深く敬意を表し，概要報告を終わります．

## ２．企画セッション報告

黒住 英司（一橋大学）

企画セッションは，1 月中旬から公募を行い，最終的に 20 件が採択され，ソフトウェアデモンストレーションセッションと合わせて 21 件の企画セッションが開催されました．セッション名とオーガナイザー（敬称略）は以下のとおりです．

・応用統計学会 学会賞受賞者講演：黒木学(統計数理研究所)・大西俊郎(九州大学) ・井元清哉（東京大学）
・応用統計学会シンポジウム：技術開発プロセスを加速させるための知の統合（協賛 品質工学会，日本 TRIZ 協会，統計数理研究所リスク解析戦略研究センター）：竹内惠行（大阪大学）・渡辺美智子（慶應義塾大学）・椿広計（統計数理研究所）
・日本計量生物学会シンポジウム：メタアナリシスにおける最近の展開：手良向聡（京都府立医科大学）・野間久史（統計数理研究所）
・日本計量生物学会 奨励賞受賞者講演：手良向聡（京都府立医科大学）
・日本分類学会シンポジウム：主成分分析の拡張と新展開：足立浩平（大阪大学）
・日本統計学会 各賞受賞者記念講演：鎌倉稔成（中央大学）
・日本計算機統計学会企画セッション：計算機統計学による大規模医療・生態系データ解析：石橋雄一（スタットラボ）・石岡文生（岡山大学）
・統計教育大学間連携ネットワーク（JINSE）の取り組み状況と今後：美添泰人（青山学院大学）
・金融リスク管理における統計的方法：塚原英敦（成城大学）
・公的統計におけるオープンデータ化の取組：坂下信之（統計センター）
・高頻度従属データの推測理論：増田弘毅（九州大学）
・GLS の理論的研究の魅力と実証的有効性：倉田博史（東京大学）
・スパース正則化による統計的推測：藤澤洋徳（統計数理研究所）
・スポーツビジネスの計量分析：プレーヤーとファンの相互作用を探る：水野誠（明治大学）
・スポーツにおけるビッグデータの活用：酒折文武（中央大学）
・スポーツ統計科学の方法論：竹内光悦（実践女子大学）
・データ中心政策科学の実践と展開：北川源四郎（情報・システム研究機構）・椿広計（統計数理研究所）
・統計科学と保険：小暮厚之（慶應義塾大学）・田中周二（日本大学）
・ビッグデータ/オープンデータ利活用人材育成に向けた統計教育の推進と質保証：藤井良宜（宮崎大学）・竹内光悦（実践女子大学）・渡辺美智子（慶應義塾大学）・日本統計学会統計教育分科会・日本統計学会統計教育委員会
・法・裁判と統計：石黒真木夫（統計数理研究所）
・ソフトウェアデモンストレーションセッション

## ３．コンペティションセッション報告

山口 和範（立教大学）

コンペセッションには 28 件の報告があり，接戦の末，最優秀賞には茂木快治さん，優秀賞には金川元信さん，菅

澤翔之助さん，深谷肇一さんが選ばれました．　セッションは，2 日間にわたって 5 セッション設けられました．審査は昨年と同数の 23 名が担当し，ひとつの報告につき，原則 10 名の審査委員が審査を行いました．研究の内容とともにプレゼンテーションも審査対象とすることがアナウンスされていました．昨年と同様，審査委員は各報告に対して A(4 点)～E(0 点)のスコアを与え，スコアの単純平均による順位によって最優秀賞と優秀賞を決定しました．

集計の結果，1 名を最優秀賞，残りの上位 3 名を優秀賞としました．研究内容，プレゼンテーションともによく準備された報告が多かったため，昨年同様，僅差で入賞の境を決めざるを得ませんでした．今回選にもれたかたも，そのような接戦であったとご理解ください．

最後に，他セッションへの参加を犠牲にして審査に当たっていただいた審査委員の方々に，この場を借りてお礼申し上げます．

**4．チュートリアルセッション報告**

西郷 浩（早稲田大学）

テーマ 1：「公的統計の二次的利用--申請手続きを中心に」
講　　師：小林 良行（元 総務省統計研修所），中村 英昭（総務省）

チュートリアルのテーマ 1 では，おふたりの講師に，公的統計の二次的利用に関して，申請にあたっての心構えから具体的な申請の方法，申請における留意点，諸外国における公的統計の二次的利用の現状について丁寧に解説していただきました．

前半は，小林講師により，公的統計の二次的利用の形式が 3 種類（オーダーメード集計と匿名データ，調査票情報の提供）あることが紹介され，おのおのの種類に応じて申請手続きの詳細が説明されました．二次的利用によって有意味な分析結果を得るためには，まず，すでに公表されている統計表の構造や結果内容に精通している必要があることが強調されました．また，利用目的には学術研究と高等教育の 2 種類があり，それぞれで委託申出事項が異なること，統計成果物のすべての利用目的を申請すること，二次的利用による成果を公表することが前提であること，などが丁寧に説明されました．

後半は，中村講師により，「諸外国における二次的利用の状況と日本の今後の方向性」と題して，ここ数年で利用件数が増えていること（平成 25 年度では，オーダーメード集計 13 件，匿名データ 41 件，調査票情報の提供 244 件），諸外国では秘匿の程度が異なる匿名データが提供されていること，オンサイト利用とプログラム送付型集計・分析，リアルタイム・オーダーメード集計が利用できる国もあること，などが紹介されました．最後に，諸外国の状況を参考に，わが国における公的統計の二次的利用の今後の方向性が展望されました．

質疑応答では，利用料金や学術研究の範囲などについて，講師との意見交換がおこなわれました．

本チュートリアルセッションは，二次的利用を検討していながら，申込方法の詳細が分からずにいた潜在的利用者に役立ったと思います．

齋藤 朗宏（北九州市立大学）

テーマ 2「マッチングと統計解析」
講　　師：岩崎 学（成蹊大学）

チュートリアルセッションテーマ 2 では，成蹊大学の岩崎学先生に，「マッチングと統計解析」というテーマで，特に疫学などの分野において，処置を施す群と対照となる群との比較場面でよく用いられているマッチングについて，統計的因果推論という枠組みからご講演頂きました．関心を集める分野であり，また，わかりやすく，かつ重要なテーマに切り込んだ多くの書籍，論文を著されている岩崎先生のご講演ということもあって，200 名近い参加申込者があり，立ち見も出る大盛況となりました．

講演では，まず実験的な研究と観察的な研究という 2 つの立場から，それぞれにおけるマッチングの目的，特徴について説明され，実際に個体同士をマッチングさせる際には，どのような方法で近い個体を選んでいくのか，また，実データに適用した場合の効果などについて述べられました．最近特にホットなトピックとなっている傾向スコアについても解説され，傾向スコアの基本について説明された上で，傾向スコアの推定を行う際には，共変量をどのように取り入れていけばいいのかについて，いくつかの考え方を示されました．

数理的な立場からのご説明ももちろんですが，マッチングを行う際の注意点，傾向スコアの利用はいつ行うのかなど，マッチングを行う際の考え方についての丁寧なお話が印象的でした．さらに特筆すべきは，充実した配布資料でした．チュートリアルの内容を大きく超える盛り沢山の内容に加え，14 ページにも渡るコメントつき参考文献一覧は圧巻で，参加できなかったが，資料は欲しいという声も聞かれました．

研究の方法を考える上で，重要な示唆を得られる有意義なチュートリアルであったことと思います．

**5．特別セッション報告**

鎌倉 稔成（中央大学）

特別セッション「統計学の各分野における教育課程編成上の参照基準について」
報告者：岩崎　学（成蹊大学）

本年 8 月に「統計学の各分野における教育課程編成上の参照基準」第 2 版が，連合理事会等の協力を得て策定されたことを受けて，広く一般会員への公開するために開催されたセッションである．午前中の企画セッション「統計教

育大学間連携ネットワーク（JINSE）の取り組み状況と今後」に引き続き，午後のセッションまでの昼休みに行われたが，統計教育に関する関心が高いこともあってか，午前中の参加者にほとんど残っていただき，盛会なものであった．

今回策定された参照基準（第２版）は，2010 年に公表された参照基準（第１版）の改訂版であり，第１版の 8 分野から 12 分野に拡充され，各分野における記載内容も，基礎部分と発展部分に分けられていて，各大学がそれぞれの教育方針に則ってのカリキュラム作成の際に有用であるような工夫がなされている．

今回の参照基準第２版は，統計関連学会連合・統計教育推進委員会および統計教育大学間連携ネットワーク・質保証委員会を中心に素案が作られ，岩崎氏は統計教育推進委員会，前理事会，現理事会に所属されており，参照基準の策定にあたっては大きく貢献された．種々の分野を横断的にまとめることの難しさについてもふれ，さらなるリファインメントが必要であると述べられた．

## ６．市民講演会報告

渡辺 美智子（慶應義塾大学）

テーマ１：統計からみた保険

講　　師：杉田 健（三井住友信託銀行）

講演では，私たちの生活に欠かせない保険の仕組みについて，大変に分かり易い解説が成されました．最初に，2011 年 10 月に発生したタイ大洪水で受けた日本企業の莫大な被害は保険によって賄われ，結果として多くの企業は災害による損失を出さなかったことやその保険金を支払った保険会社自身も保険会社を対象とする「再保険会社」の保険に加入していたため，そこから保険金の支払いを受け，結果としてどこも大きな損失を出さなかったことが紹介され，保険の有用性が印象深く語られました．その保険を支える仕組みの根幹に，「大数の法則」と「収支相等の原則」という数学概念があること，また，「年齢別死亡率」という統計が最も重要な要素になっていることが図表を使って説明されました．保険商品の設計には，いろいろな条件設定に応じた「死亡率」の推計を如何に精度よく求めるかが鍵となることが示され，そのことを示した歴史上の重要な人物が，ハレー彗星で有名な英国の科学者エドモンド・ハレー博士であり，1693 年の論文で既に，現在の加入者の年齢別に保険料（掛金）を変える根拠が算定されていた事実が紹介されるなど，大変に興味深い講演内容で，一般市民の方も多く参加されていましたが，みなさんお話しに惹きこまれていました．保険と貯蓄とどちらが有利なのかという誰もが抱く質問にも，理論面と精神面の双方でお答えいただくなど，一市民としてためになるお話しでした．

テーマ２：漱石の目指した統計科学

講　　師：椿 広計（統計数理研究所）

講演では，日本における統計科学の夜明け前の時代に，統計とは別の領域で著名な人物，味の素の発明で知られる化学者，池田菊苗と文学者の夏目漱石が，実は Karl Pearson の統計科学の思想と強く係わりを持っていたという大変に興味深い話が語られました．

漱石の話に入る前に，ロンドンの University College School の応用数学教授である W. K. Clifford が 1875 頃に，Number, Space, Quantity, Position, Motion, Mass の 6 章構成で，The First Principle of Mathematical Sciences Explained to the Non-Mathematical を構想し，それが 10 年後の 1885 年に同大学教授の Pearson によって，Mass の章を除く 5 章構成で，Common Sense of the Exact Science として完成されたこと，数理科学の啓蒙書として非常に重要なこの本が，同大学で Pearson と学友であった菊池大麓によって，1856 年には既に日本でも「数理釈義」として訳され出版されていたことが詳しく紹介され，一気に当時の先達たちの偉業に惹きこまれました．

その後，ロンドン留学時代の漱石が同宿の池田菊苗との科学論議や Pearson の著書「科学の文法」に感化されたことや科学に基づく文学評論研究を志向したこと，科学の文法を乗り越えようとした漱石の思いが語られ，あっと言う間の 40 分でした．

漱石や寺田寅彦の残した言葉を通じて，Pearson が構想した統計科学がどのようなもので，どのような考え方として解釈されたかも紹介され，統計科学が現在のブームではなく，日本でも古くから注目されていた学問であり，広い適用分野を持っていることが市民の方々だけではなく私たち関係者にも伝わった大変有意義なお話しでした．

## ７．文部科学省　数学協働プログラム・ワークショップ報告

大森 裕浩（東京大学）

2014 年度統計関連学会連合大会では，東京大学大学院経済学研究科，文部科学省（統計数理研究所），統計関連学会連合の共催で，数学協働プログラムによるワークショップ「統計科学の新展開と産業界・社会への応用」を 9 月 14 日，15 日の 2 日間にわたって開催いたしました．

今年度は特に産業界・社会への広範囲の分野における応用に，数学・数理科学の知見がどのように活用していくことができるのかを明らかにしていくため，大会の企画セッションのうち，「スポーツにおけるビッグデータの活用」，「公的統計におけるオープンデータ化の取組」，「データ中心政策科学の実践と展開」，「法・裁判と統計学」，「統計科学と保険」，「計算機統計学による大規模医療・生態系データ解析」の６つのセッションによってワークショップを構成しました．

ワークショップでは，研究振興局 基礎研究振興課 融合領域研究推進官（数学イノベーションユニット次長）の栗

辻康博氏による数学協働プログラムの趣旨の説明，統計数理研究所の伊藤聡先生による数学協働プログラムの活動紹介に引き続き，合計 27 の講演が行われ，大学・研究所等機関の他，それぞれのトピックに関連した様々な産業界からの研究発表者をお迎えしました． ワークショップ会場は常に熱気であふれ， 参加者の人数が会場の定員を超えることもしばしばで，数学・数理科学に加えて諸科学の大学・研究所や産業界・官庁など広範囲からの参加者があり，成功裡に終えることができました． これもひとえに，セッションオーガナイザーが取り上げてくださった魅力的なテーマ，講演者の方々の興味深い研究発表，参加者の皆様との活発な議論の賜物と，心より皆様に感謝を申し上げます．

最後に，申請段階からアドバイスを下さった岡山大学の栗原考次先生，大阪大学の大屋幸輔先生，プログラムを選定してくださった早稲田大学の西郷浩先生には大変お世話になりました．この場をお借りして御礼を申し上げます．

## ８．コンペセッション受賞者の言葉

茂木 快治（早稲田大学）

この度は 2014 年度統計関連学会連合大会コンペティションセッションにおきまして「最優秀報告賞」という名誉ある賞を頂き，大変光栄に思うとともに恐縮しております．コンペティションセッション運営担当の先生方と匿名の審査員の方々に感謝申し上げます．

今回発表させて頂きました “Testing for Granger Causality with Mixed Frequency Data” は，観測頻度の異なる時系列データの間のグランジャー因果性を定義し検定することを目的としています．この検定は，データの集計化を伴う従来の因果性検定よりも高い検出力を有します．また，観測頻度の異なる時系列データは学術分野を問わず広く存在しますので，応用範囲の広い検定であると考えます．

本研究はノースカロライナ大学チャペルヒル校経済学部博士課程へ留学していた時にご指導頂いたエリック・ガイセルズ先生とジョナサン・ヒル先生との共同研究です．両先生の学恩に深謝致します．今回の受賞を励みとして，今後も観測頻度の異なる多変量時系列に関する理論的・実証的研究を深めていきたいと考えております．

金川 元信（総合研究大学院大学）

このたびは優秀報告賞をいただき，本当に光栄です．選んでいただいた選考委員の皆様に深く感謝いたします．また平素よりご指導いただいている福水健次先生，共同研究をさせていただいている鈴木大慈先生，および普段より研究についての議論の相手をしてくださっている研究室の皆様にお礼申し上げます．

本報告では，同時分布からのサンプルから条件付き確率密度をノンパラメトリックに推定する問題を扱いました．条件付き確率密度推定は，回帰分析ではとらえることのできない説明変数と目的変数の間の関係を明らかにできる点で非常に重要です．しかしながら，回帰分析が非常によく研究されてきたのに比べ，この問題は現在までほとんど注目を浴びてきませんでした．そのため今回の発表では，条件付き確率密度推定の重要性を聴衆の方々に伝えることを目標としました．

今回，優秀報告賞をいただいたことで，私自身としても条件付き確率密度推定について研究を行うことに自信を持つことができました．今後とも努力を怠らず研究していきたいと思います．

菅澤　翔之助（東京大学）

この度は，コンペティション講演にて優秀報告賞を頂き，大変光栄に存じます．審査をはじめとして，コンペティション講演を運営・企画してくださった大会運営関係者の皆様に，厚く御礼を申し上げます．平素より大変熱心に指導していただいている久保川達也先生，お世話になっている先生方，そして大学院生の皆様に心より感謝申し上げます．

本報告では，正値や有界な小地域データを解析することを目的に，データのパラメトリック変換を組み込んだ線形混合モデルについて発表させていただきました．データの変換方法として従来頻繁に用いられる対数変換やロジスティック変換は必ずしも妥当ではなく，提案したモデルで推定を行った方が自然であり，有用であることがわかりました．

今回の受賞に慢心せず，より一層精進していく所存ですので，今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます．

深谷 肇一（統計数理研究所）

このたびはコンペティション講演において優秀報告賞をいただき，大変光栄に存じます．

本報告では，生物群集の動態を要約するパラメータとしての推移確率の推定において，観測誤差による推定バイアスを改善するために生物群集の局所構造を考慮した統計モデルを提案いたしました．今後は，このモデルを生態学的研究の新しいツールの一つとして，実データへの適用を進めていきたいと考えております．

今回の受賞を励みに，今後も良い研究ができるよう努めてまいります．大会運営関係者の皆様，審査をしていただいた皆様，講演を聞いていただいた皆様にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます．